魔法少女は俺がやるっ！

秋兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女は俺がやるっ！

【Ｎコード】
Ｎ８７４１Ｌ

【作者名】
秋兎

【あらすじ】
つまらない日常にうんざりしていた不良少年の主人公は、ある日異世界へ飛ばされる。そこには一人のポニーテール魔法少女が立っていた。「あなたは、魔法少女になったの」そう告げられた彼がおそるおそる自分の姿を見てみると、なんと女体化してしまっているではないか！必死に元の世界へ帰してくれと頼む彼に少女はある条件を出した――。魔法と召還獣を使いこなす、最強系主人公&最強系ヒロインの無敵タッグな異世界召還ものです。♪四石以降フルカラーの挿絵が全話に入ってます♪　☆１／６

更新！☆『第十六石：飲み込んだ世界を、もう一度』　★今回の挿絵★『ホバー・ザ・ルヒエル』※コメディ８割シリアス２割※

プロローグ

日常、それはとても退屈なものだった。

だが、それはとても幸福なものだった。

いつものような毎日が永遠に続くものだと思っていた。

＋　＋　＋

「……」

空に昇る巨大な赤い月を呆然と見上げる。

雲もないのにフワフワと舞い降りる赤い雪を払いのけ、

俺はひんやりとしたベンチから起き上がった。

「あー。悪いが、そこのチビ助。もう一度言ってくれないか」

はいた白い息は、すぐさま赤い世界に埋もれてしまう。

目の前に佇む少女は、俺のため息に自分の吐息を重ねながら、ごにょごにょと呟いた。

「だ、だからね、」

決心したように彼女は笑顔で続ける。

「あなたは、魔法少女になったの」

……。

我ながらバカな夢をみるものだ。

俺にそんな願望があったなんてね。

はは、恐ろしい。

「笑えん冗談だな」

ひらひらと手を振り再びベンチに横たわると、強引に目を閉じてやる。

これは悪い夢だ。そうに違いない。

現実世界に戻ろうとまどろむ俺の頬に冷たいモノが触れる。

「キミは、あったかいんだね……」

＋　＋　＋

幸せの壊れる瞬間なんて、あっけないものだった。

シアワセ――。

それは、ガラスのように透明で解りづらいモノ。
そして、ガラスのように簡単に割れやすいモノ。
割れた破片はそれを越えようとする人をいとも簡単に傷つける。
体だけでなく心さえも、それは無残なまでに。
その破片に足を取られ、転んでしまわないように。
何故なら起き上がるには耐え難い苦痛を伴うから。
ああ……。
知らなかったんだ。こんなにも幸せが脆いものだったなんて。
どうして、と笑う彼女を背に、俺は泣いていた。
この美しくも醜い世界をただただ呪うしかなかった。
「もう行かなくちゃ」
少女は言った。
「ごめんね」
そう、悲しみを添えて。

第一石：シャクヤク異世界に立つ！！

「……へっくし！」

寒い。寝返りをうちながら、俺は鼻をグシグシとこする。

今何時だ？

……いや。まぁ、いいか。今日もいつものように遅刻して行こう。むしろ、休んじまうか。面倒だし。

今更、不良の俺なんかが定時きっかりに学校へ行ったところで熱でもあるのかと疑われるだけだろうし。

あー。考えるだけで鬱陶しい。やめだやめ。

とりあえず今はモーレツに眠い――包み込むような眠気に俺はそのまま身を委ねることにする。

目を閉じ、再び眠りの中へとダイブを……。

「おい、そこのシラガムスメ」

ダイブを……。

「おいってば。おめぇはいつまでグースカと他人様の布団で寝てんだよ！　その自慢の白髪、真っ赤に染めかますぞコノヤロー！」

朝っぱらからうるさいな。どこのヤンキー女だ。

つーか、ムスメなんざ俺の家に居ないっつーの。親父と俺しかいない、町内一のむさくるしい家族をなめないで頂きたい。

「恐縮だが、隣の家と勘違いしちゃあございませんかねェ。あいにく、ここは男だらけの大父子家庭でね。白髪なのは認めるけれども」

布団をかぶり、そう返す。やがて静寂が部屋を満たした。

案外とまぁ、あっさり引き下がったもんだ。

少し残念な気もするけれども。今はとにかく――眠い。

「さてはてと」

言いながら、ぬくぬくと猫のように体を丸める。

うつらうつらとしかけた時――

どすん。

なにかが俺の胸の上に……ぐお！

「寝ぼけてんじゃねぇよ。そのツラのどこが男だってーんだ！」

何を。こいつは、さっきから何を言っているんだ。寝ぼけてんのはお前のほうだろうが。

ああ、頭に来た。

俺は布団から飛び起きると、フワフワと浮かぶそいつをガシっと

掴んで、

「せっかくの俺の二度寝タイムを邪魔しやがって！　この、クソ猫が――って、猫だぁ！？」

即座に慌てて放してしまった。

おいおい、こりゃあなんのジョークだ。

なんせ俺の前に浮かぶは、ちびっこい黒猫。こいつが喋ったのだというから頭が痛い。やべえ、マジで寝ぼけてんのかも俺。

じゃなかったら、なにかの手品か？　そう手で猫の背中辺りを触ってみるが、

「言っとくが、糸なんかで吊るされてねーからな……って、これポニ子んときにも言った気がするぜ」

小さな肉球をやれやれと言わんばかりに己の頭にポフッとあて、眉間にシワを寄せる。

この仕草。この表情。

こいつは、ホンモノだ……。ファービーのパチモンじゃないことだけは確かだ。

「なるほど。この猫、マスコミに売ったら俺は一攫千金……一生左団扇で暮らせるというわけか。益体も無い女が天から降ってくるよりも有難いな」

「ぬわぁにが、なるほど。だてめぇ！　つーか、可愛い顔して物騒なこと言ってんじゃねぇ、このバカシラガ！」

ほほう。口は悪いが、それもまた愛嬌。キャラ的には申し分ない。これは良い見世物になるな。上手くいけば遊園地のマスコットキャラクター的な立ち位置もありうるかもしれん。

とにもかくにも悪は急げだ。俺はそいつを再び掴むと、勢い良くベッドから飛び降り――っ

「うにょえっ！？」

奇妙な鳴き声を発するグニャとした何かを踏んづけ、

「おわっ！」

盛大に転んでしまった。

ジンジンと痛む頭を抑えながら、俺は立ち上がり、そしてギョッとした。

何故ならば、その踏んづけた物体とは――

「……あうぅう、痛いよぉ！　おなか破れるぅー！」

どこにでもいそうな女のガキんちょだった。

腹を抱え、ごろごろと辛そうにのた打ち回っている。

なかなかにファンキーな動きをするものだ。今時の若者にしては筋がいい。

ふむ、と。俺はそいつを観察してみたりしてみる。

腰まである長い黒髪に、歳は俺より若いだろう。いや、それもかなりだ。見たところ小学生くらいに思える。

俺が十四だから――四、五つ下くらいか。ガラガラ蛇と蜘蛛が威嚇しあっている柄というハイセンスなパジャマを着たそいつは、涙目で俺を見上げると、

「あうぅー！　のんびり解説してないで、もっと他になんか言うことあると思うよぅ」

「おお、すまんチビ助。あまりに見事な転げ回りっぷりに見惚れてしまってな。リアクションの勉強になったよ、いささかに」

いやはや、しかしまぁ。なんだ。

「かなり遅れた気がするんだが、一体お前らは何者――もとい、何処の妖怪だ？　そしてこの少女少女した装飾をした部屋はなんなんだ。スイーツなお化け屋敷ブームが到来することを予見しての先取りなのか」

「よ、妖怪じゃないもん。あと、ここはお化け屋敷じゃなくってボクの部屋！」

そう女の子座りのままぷいっとそっぽを向くチビ娘。

「そうか。妖怪じゃないもんっていう妖怪か。座敷わらしにも色々な亜種がいるんだな。また勉強になったよ、いささかにな」

「違うもん！　人間だもん！」

「もんもんって、お前はモンザムライかよ。安土桃山時代からタイムスリップでやってきたのか。どうせなら平成なんつー下らん時代じゃなく、もっと未来にしたほうが良かったと思うぞ」

「あうぅ～、ちゃんとしたお話が出来てないような気がするよ。と、とにかく！　ボクの名前は久樹上（ひさきがみ）ゆりな、だよ。それに、タイムスリップはボクじゃなくって、キミのほうだと思う……」

「だろうねぇ」

俺は未だ温もりを保つベッドの上に座ると、手の中で黙りこくったままの黒猫をゆるりと解放した。

何を考えているのだろうか、そいつは飛び立とうとせず、俺の手のひらの上で少女の顔をジッと見つめている。

「だろうねって、キミもしかして気づいてたの？」

その少女――ゆりなは立ち上がると、目を丸くした。

「いやぁ。正直、さっきまでは頭がぼんやりしてワケがわからなかったが、今になって意識がはっきりしてきたんだ。ありゃあ夢かと思ってたが、お前さんの顔覚えてるぜ。俺に魔法少女どうのって言ってた奴だろ？」

「そう、だっけ」

チビ娘はとぼけるように言う。

む。まさかマジで夢だったのか。あの時のトンチキな格好をした少女と瓜二つの顔をしている気がしたのだが。似ているだけか？

「いや、ポニ子。腹を決めようぜ。こいつが俺たちの目の前で召還されたのは多分、そういうことなんだろうよ」

「でもでも！　そんな、簡単に巻き込んでいいとは思わないよ。確かに少し魔力は感じるけど、でも『魔法使い』になるってことは……」

「大丈夫さ。このシラガ娘は絡みづらいが、肝は据わっている。魔法使いとしての素質も十ニ分にあるぜ、ポニ子ほどじゃあねぇけどな。それに、戦力は一人でも多い方がいい」

「……無関係の人なんだよ。ダメだよ、そんなの」

「この世界に、魔力を持って召還された。これのどこが無関係なんだっつうの。――おめぇの気持ちも解るけどよ」

なにやら、やっこさん達で勝手に話を進めてやがるし。当事者置いてけぼり過ぎるぞ。

ま、どうでもいいがな。魔法使いだかなんだか知らねぇが、テキトーに相槌打って、俺はとっとと家に帰らせてもらうだけだ。

手土産にこの、世にも珍しい空飛ぶドル札をぶん捕まえてな。きっと喜ぶだろうな、親父のヤツ。

「もしかして、あのお婆ちゃんが召還したのかな……」

「だろうな。あのババアの仕業とみてほぼ間違いないと思うぜ。あまりにもタイミングが出来すぎてるからな。どっかの世界から魔法使いになりえそうなヤツを引っ張ってきてやるから、とっととパンドラの箱を封印してくれってことだろう。それくらい、切羽詰ってるんだろうさ」

「それならそうと、言えばいいのになぁ」

「何か考えがあるのかもな。……まぁ。あのババアはまともじゃねぇから、なんとも」

「あ、ってことはだよ。いっぱいある世界の中から選ばれた一人ってことだよね。じゃあ、もしかしてものすっごーい期待の新人さん？」

「キャパシティーに関しては、お前の方が優秀だとは思うが。まぁ、まだ杖も持たせてねぇんだ。どれくらい素質があるのかは正直、見当もつかねぇな」

「そっかぁ。そういえば、杖って言ってもボクのしかないよ？」

「ああ、それについてなんだが――」

長い、長すぎる。

暇をもてあました俺は、とりあえずゆらゆら動く、黒猫の尻尾をちょいちょいと指で弾いて遊ぶことにした。

ていっ、ていっ。てててていっ。

「だぁ、バカシラガっ！　人が真面目に話してるときに尻尾にジャレつくんじゃねぇ！」

すさまじいスピードの猫パンチが俺の左頬を強打した。つーか、人じゃないだろお前！

「いっててて、よくもやりやがったな、クソ猫ぉお……」

このジャジャ猫め。俺が猫派だからといって下手に出ればこんちくしょう。

「けっ、さっきからクソ猫クソ猫って。オレの名は――クロエだ。霊獣クロエ。無い頭によぉく叩き込んでおくんだな」

「ほう。そうかい。化け猫さんにも名前があるとは結構なことだね。んで、クロエさんよぉ。その霊獣というのは一体なんだね。苗字にしてはいささかに訝しいものだが」

と、俺はからかい気味に言ってみる。

しかし。答えたのは少女のほうだった。

「色々、疑問があって当然だよね。大丈夫、まとめてボクから説明するよ。ボクもイマイチわかんないところ、あるけど……でも、その前にキミの名前を聞かせてもらえると嬉しいな」

澄んだ黒い瞳。無垢な視線が突き刺さる。ああ――こういうの苦手なんだよな、俺って。

テレビでたまにやるような動物特集なんてものが親父は好きらしく、よく居間で観ているんだが、俺はあいつらの人を見透かしたような瞳がキライでね。どうしようもなく胸がモヤモヤして、いつもすぐに席を立つんだ。

「どうしたの？」

ゆりなが俺の顔を覗き込む。

まただ。胸がチクっと痛み、俺はため息をついた。そんな目で、あまり見ないでくれとも言えねぇし。

「……ああ、そうそう。名前、ね」

まあ、こいつらに本名を明かす必要もないだろう。どうせ長い付き合いんじゃないんだ。テキトーでいい。

俺はフッと視線を逸らすと、小さな学習机の上に置いてある一冊の本に目をとめた。

季節の花図鑑――か。

そいつをパラっとめくりながら、俺は気だるくこう答えた。

「あー。俺の名前は、シャクヤク。よく、人に珍しいねって言われます。でも覚えやすいようで近所のおばちゃんには大好評です。恐縮だけれど、ヨロシクどうぞして頂ければこれ幸いってなもんで」

しばしの間。

「あんだぁ、その妙ちくりんな名前は！　オレの事言えねぇだろ！
つーか、お前。今、その図鑑からとっただろ！」

クロエが毛を逆立てて矢継ぎ早にツッコむ。

いやま、そりゃ当然の反応だ。

「ええと。それについてはだな、」

言いかけたところで、黒髪少女がずいっと割り込んで、

「ダメだよ、クーちゃん！　ボクは、とっても可愛い名前だと思うもん。シャクヤクちゃん……、ううん。しゃっちゃんって呼んでいいかなっ？」

と。

んな名前あるわきゃないのに。フツー信じるかねぇ。それに言いづらくないか、そのしゃっちゃんってのは。妥協してさっちゃんでもいいんだぜ。某大手の幽霊様とかぶっちゃいるが、さ。

いやはや、まったくもって。なんだろうねぇ、この子は。

俺にはどうもこの子がわからない。今までの人生で会ったことないのだ、こんな娘に。

――いや、こんな人にか。

だから、この時の俺はどう答えればいいかわからず、アホ面満開にただ頷くしかなかった。

「わーい、やったぁ！　じゃあ、自己紹介も済んだことだし。かいつまんで説明するね。ボクたちのこと、魔法のこと、この世界のこと。そして――キミのことを」

言うと、ゆりなは俺の隣にそっと座り。そして、ゆっくりと。たどたどしく、話を始めた。

第一石：シャクヤク異世界に立つ！！（後書き）

投稿スピード重視のコメディものです。楽しんで頂けたら幸せです。
気を抜いてるようでちょっぴり本気だったりもします。
物語を楽しむヒントその１。『花言葉』

第二石：鏡の中に映る少女

「ある日ね、ボクの家に小さな箱が送られてきたの。キラキラたくさんの宝石に彩られた、とても可愛い小箱。ええっと、確かこの辺に」

言うと、ベッドの下からもぞもぞと小箱を取り出した。ほぉ。ごてごてとまぁ、立派なものだな。

「でしょ。それでね、一体何が入ってるんだろうって開けてみたら、凄い数の宝石がつまってたの。赤いのとか、青いのとか。とっても綺麗な宝石たちがいっぱい。綺麗だなーってしばらく見惚れてたんだけど、急に爆発したの。どっかーんって」

はて。爆発した割には焦げ痕が見当たらないが。

というか、よく五体満足でいられたな。

そんな至近距離で爆発があったというのならば、普通無事では済まないと思うのだが。

「ち、違うよ。そういう爆発じゃなくって、なんていうのかなー。七色の光が、ぶぁ～って！　それでそれで、中に入ってた宝石が、ばびゅ～んって、……えっと、あのあの」

ぶぁ～、に。ばびゅ～ん、ですか。

まるで子どもみたいな説明だな――って、子どもだったな。そういや。

しょうがねぇかと溜め息をついた俺に、ゆりなが慌てて両手を振る。

「ふぇ～っ。しゃっちゃん、ごめんね！　あうう、クーちゃん助けてぇえ」

説明係りに任命されたクロエは嫌な顔をするかと思いきや、待ってましたとばかりにゆりなの頭上へと着地すると、

「へっ。だろうと思ってたぜ。しょうがねぇな、ここからはオレが説明してやる。よぉく耳の穴かっぽじって聞くんだな。ええっと、なんだ。そうそうこの箱だ。こいつは、『パンドラの箱』ってんだ」

パンドラだぁ？　こんなちっこい箱がそんな壮大な箱には見えねぇぞ。いささかに、怪しいものだな。

「怪しめ怪しめ。オレだって正直な話、これがあの伝説のパンドラかどうかは半信半疑さ」

けけっと笑いながら、

「だが、このパンドラ――もしくは、パンドラモドキにはあらゆる災害、すなわち『厄災』が詰め込まれていた。これはマジだ。そう、伝説の箱そのままにな」

災害か。地震、雷、火災、みたいなアレかい。

「あぁ、そんなところだな。んで、それらの厄災は『七匹の霊獣』と呼ばれる護り神に一つずつ封印され、箱に詰められていたんだ。

ここ数百年は何事もなくピースの元で保管されていたんだが、何がどう回りまわってか、こいつ――ポニ子んところに突然パンドラが送られちまったワケ。そして、」

しばらく聞き入っていたゆりながそれに続けて、

「そしてね。ボクがそれを開けちゃって、霊獣さん達みんな散り散りに飛んで行っちゃったんだ……」

なるほどな。爆発というのは、そいつらが逃げ出した瞬間のことを言ったのか。

「……うん」

こくんと、すまなそうに俯く。足場を失った黒猫は慣れた動きでゆりなの肩へと移動すると、

「だぁら、おめぇは悪くないっつーの。ピースのやろうがちゃんと見張ってねぇから悪いんだ」

ええとだな。とりあえず『ピース』とやらが何なのか見えてこないのだが。

「ああ、ピースっつうのは詳しく説明すれば長くなるが、端的に言えば魔女だ。この世界で現存する唯一にして最強の魔女。これは、ババア本人が言っていたから本当かどうか定かじゃねぇケド」

「ボクは本当だと思う。だって、そのお婆ちゃんからあんなすっごい魔法の力をもらったんだから。絶対、凄い魔女さんに違いないよっ」

自信おありなようで。会ったのかい、そのピースという婆さんに。

「ううん。声だけ、かな」

「滅多に人前に姿を現さないからな、あの婆さんは。出てきたとしても、いつも不気味な面をかぶっていやがるし。そーいや、オレでさえ素顔は見たことねぇかも。まぁ、それは置いといてだ。そのピースから魔力と杖を授かったポニ子は、飛んで行ってしまった宝石を集めなきゃいけねぇことになったワケ」

ははぁ。

なにやら凄い魔女だというのは分かったが、そんなに凄い凄いと言うのならば、そのピースとやらが直々に宝石を探しに行ったほうが速いんじゃあないのか。

わざわざ、ペーペーの子どもに魔法伝授なんていうまどろっこしいやり方じゃなくてよ。

もたもたしてちゃあヤバイんだろ、厄災っつうくらいだし。

「真っ当な意見だな。オレもそう思うぜ。まぁ、答えは単純な話だ。あのババアは――ピースはまともなヤツじゃない。何を考えているのか分からない変人さ。あいつは自分ではさらさら動く気がないらしい。だが、ポニ子ひとりじゃあ全ての宝石を探し出すには、さすがに時間がかかりすぎるってことで、」

なるほどねぇ。中々に読めてきたぞ。俺がァ、アレかい。そういうことかい。

「ご明察」

黒猫がニヤリと笑う。

「そう、おめぇに白羽の矢が立ったというわけだ。ポニ子とシラガ娘の二人でならスムーズに宝石を集められるだろう、ってな」

あー、予想以上に面倒な話だ。そんじゃま、ここいらが引き際かね。

「へぇへぇ。そりゃあ光栄痛み入る話で。だがね。恐縮だけれども、辞退させてもらうよ。俺ァ、ロボットやＳＦ世界なんてものは好きだけどよぉ、魔法なんてものには一切ピンともカンとも興味が沸かなくてね。もう一度ピースという婆さんに選抜し直してもらうことをオススメするさね。やりたいヤツは沢山いるだろうし。悪ぃけれどもってことで、そろそろお暇を――」

俺の言葉に、ゆりなが顔を上げた。

「うん。しょうがないよね。……無関係なしゃっちゃんを巻き込むわけにはいかないし。大丈夫だよ、ボクひとりで出来るもん」

うお。またあの瞳だ。やめてくれっての、それ苦手だから。

あと、しゃっちゃんはやっぱり言いにくいだろ。

「……ひっぐ、うぅ」

って、おいおいマジか。

ぽたぽたとゆりなの瞳から大粒の涙がこぼれ始めたところで、耐えきれなくなった俺は立ち上がって、

「まァ。そう悲観しなさんな。すぐに代わりはやってくるさ。次はきっと、俺より男前なペンペン草クン辺りが来るだろうさ。そしたら、ペンペンちゃんとかペン草ちゃんとか噛まないような名前で気軽に呼べるぞ。喜べ。そして笑え。出来たら泣き止め」

と。俺にしちゃあ頑張ったほうなんだが。

しかしながら。

「……ひっぐ、しゃっちゃんのほうが可愛いもん。ひっぐ、噛まないもん。ひゃっちゃん、うぇぇえん」

いやいや、さっそく噛んでるし。

「あーあ。ポニ子を泣かしてやんの、バカシラガ。しーらね、しらね。ピースに言ってやろ。けけっ」

クロエが茶化しながらふよふよと面白そうに俺の目の前を飛び回りやがる。

「クソ猫ォ。ふざけてねぇで、どーにかしてくれよ。男が子どもを、しかも女を泣かしたとくりゃあ、親父に申し訳がたたねぇって」

言い切った俺だったが。

ん――？　なんだ、この空気は。

さきほどまでケラケラと楽しそうに浮遊していたクロエが突然ストップし、

「……男がぁ？」

訝しそうな目で嘗め回すように俺の顔を見る。

ついでに、わーわー泣いていたゆりなも、きょとん顔で俺をジィっと見上げている。

「……子どもを？」

「な、なんだよ。俺のツラに何か変なものでも、」

言いかけたところで、そいつらは顔を見合わせてドッと笑い出した。

「にゃはははっ！　男が、子どもを、だってよ！　こいつは笑えるぜっ」

「だ、ダメだよクーちゃん。しゃっちゃんは本気で気付いてないんだよ……ぷっ、あはははは！」

ちょっと、タンマ。マジで何を笑ってんのか理解出来ないのだが。

いやいやいや。そんな、お二人さん。

笑い転げてるところすまないけどもさ、なにがそんなにツボに入ったんだって。

さっきまでの涙を笑い涙に変えたゆりなが、うろたえる俺に、
「しゃ、しゃっちゃんの後ろに鏡あるから、それ見てみるといいよ」
鏡ィ？
身体をねじると、確かにそこに鏡があった。
「鏡はあるけどもよぉ。それが、どうしたって――」
時が止まった。
こんなありきたりな表現が精一杯だった。
全細胞がそれまでの作業を中断し、口々に「どういうことだよ……」と騒ぎ立てているかのような。
それほどまでに、鏡の中は狂っていた。
「どうだい、生まれ変わったてめぇの姿は。可愛いじゃあねぇか、いささかに。ってかぁ？　にゃはははっ」
黒猫のからかいにツッコむ気すら起きん……。
「おかしいなーって思ってたけど、本当に気付いてなかったんだね。しゃっちゃんってば」
ああ、そうさ。今の今まで気付かなかった。笑われて当然だったな。

なんて――バカバカしい。

なんて――滑稽な。

長いまつげ。震える桃色の唇。ふんわりと緩いカーブに整えられた銀髪。

版権もののネズミがプリントされたガキくさい白のキャミソールに、やたらに丈の短い水色のスカート。

＞ｉ１２５２３―１７６１＜

「なんじゃこりゃ」

鏡の中のチビ女が俺の挙動を逐一真似やがる。

シャドーボクシングをすれば、鏡の中のそいつが微笑ましいパンチを繰り出すし、

メンチを切る仕草をすれば、鏡の中のそいつは悩ましげな表情をするし――

「って、なんじゃこりゃぁあ！！」

両手を振り上げて膝から崩れ落ちつつ、もう一度だけ念のために叫んでみる。

が。

やはりというべきか、掃除の時間にテンションがあがってふざけちゃいましたと言わんばかりのガキんちょが鏡の中にいた。

ふむ。

少し乱れてしまったスカートと前髪をちょいちょいと直しながら、こほんと咳きを一つ。

「おい、コラァアア！　ニャン畜生ォオオ。命が惜しけりゃ、悪いことは言わねぇ。俺様を元の姿に戻せ、いますぐにだ」

隣でニヤニヤと笑う黒猫の尻尾をシャカシャカと振りながらすごんでみるが、

「そいつは無理だな。オレに言われても、こればっかりはおめぇを呼んだピースじゃねぇとさぁ」

「だったらピースを呼べ！　俺は男に戻って元の世界に帰るっ。こんなふざけた話があるかよ！」

言うと、クロエはスッと真顔になって飛び上がり、

「――元の姿に戻り、そして元の世界に帰りたいのなら、いくら探したって方法は一つしかないぜ。お前が第二の魔法少女となり、ポニ子と……ゆりなと一緒に散らばった宝石を全て集めることだ。どうあがいても、これしかテメェに道はねぇよ」

俺を見下ろしながら、冷ややかな口調でそう告げた。

第三石：まな板の上の猫

こいつは……。

なんて、簡単に言いやがる。

だいたいに何故、男の俺がガキ娘の姿に変えられてまで宝石とやらを探さなきゃならんのだ。

ハナっから女を選んで、そいつにやらせりゃあいいのに。

魔法少女なんてもんは、女の仕事だろ。

「さっきも言ったが、ピースの考えはオレだって良くわからねぇぜ。これは多分だが、察するに大物になりうるであろう素質さえ備わってりゃ、性別はどっちでもいいのかもしれねぇな。どうであれ、性別を変えるくらい、あのババァだったら朝飯前だろうし」

「だから、どっちでもいーなら、なんでワザワザ女に変える必要があるんだ。

男のまんまでいいだろ。魔法少年ってことでさァ」

「あー。言われてみりゃ、そうだな。うーん。ほら、アレだろ。ピースの趣味。

魔法使いは、やっぱり少女じゃないとダメっていうさ」

イヤな趣味のババァだな……。

「自分が歳を食ってるっていうんで、若い女を従えてピチピチエネルギーを吸収しようとしている、とかな。にっしっし！」

ピチピチエネルギーて。

「魔法世界の上下関係なんざ、まったくもって知らないけどもよォ。そいつは偉い魔女なんだろ？
よくそんな口の悪さでやっていけるな。俺がピースだったら、とりあえずお前さんをクビにするぞ」

言いつつ、ゆりなの横へどっかりとあぐらをかいた俺に、

「それは出来ないと思うよ。だって、クーちゃんは特別だもん」

すっかり笑顔を取り戻したゆりなが、自慢げに無い胸を仰け反らせながら言う。

「しゃ、しゃっちゃん！」

>i15216—1761<

……ん？

「むーっ！　ボクだって一応女の子なんだからねっ」

ふうん。

イッチョ前に顔赤らめて、まァ。

「わりぃ、うそうそ。言葉の綾だって。日本語むつかしいアル」

「うー。訂正を要求します！」

謝罪までいかなくて良かったよ。

「オーケイ」

んじゃ、えーと。

すっかり笑顔を取り戻したゆりなが、自慢げにナイスバディを仰け反らせながら——

「そ、そーゆー意味じゃないよっ！」

泣いたり笑ったり怒ったりと。

なんとも忙しい奴だな。

「あっ」

ゆりなが驚いた声を出し、俺の顔を覗き込む。

「な、なんだぁ？」

「今、しゃっちゃん笑ったでしょ。とっても可愛かったよ」

にへへーと屈託のない笑みを向ける少女。

……ったく。

俺ばかりが面食らって、どうもね。割に合わん。

そうだな、ここはひとつ。

「なんだ知らなかったのか、俺はどんな表情でも可愛いんだぜ」

耳にかかる髪をかきあげながら言ってやる。

ちなみにこの仕草は俺が一番グッとくるヤツだ。

「うんっ！」

って、おい。

「そこは否定してくれって、冗談に決まってるだろうよ。恥ずかしい」

「えへへ。恥ずかしがってるしゃっちゃんも可愛いよ」

「……そりゃどーも」

そういえば。

さっき、こいつに顔を覗き込まれても胸が痛まなかったな。

どうでもいい話ではあるけども。

「仲良きことは美しきかな。微笑ましいところ悪いが。おめぇら、ちょっち窓の外を見てみそ」

唐突に、クロエがシリアスな声色で言う。

「へ？」

二人で外を見やる――と。

朝焼けの中に一匹の蝶々が舞っていた。何故かその羽根は淡緑色に発光している。

「ほよー。光ってるキレイな蝶々さんだ。あはは。やっぱし気になるんだ？

なんだかんだ言って、クーちゃんって猫さんだよね。

今日のにゃんこってテレビに出てた子も蝶々さんと遊ぶの好きだったし」

クロエはやれやれとばかりにため息をついて、

「バーロォ。おめぇさァ、羽が光ってるテフテフなんざ現実にいるわきゃねーだろ」

「えっ！？」

俺たちは同時に驚いた。

浮遊する猫が存在しているくらいなんだから、光ってる蝶だっていそうなもんだけどな。

「シラガ娘は勘違いしてるみたいだが、オレたちが特別なだけであって、世界自体は至極真っ当なんだ。
みんな、魔法なんて現実にあるとも知らずに暮らしている。
それこそマンガやアニメの世界のものだって認識さ」

ということは、俺が元に居た世界とあまり変わらないのか？

「どうかな。まず、おめぇがどういった世界に居たかを知らねぇし。まぁ、自分の目で確かめてみることだな、早速よ」

早速――？

「オレの話きいてたろ。パンドラから逃げ出した七匹の霊獣を魔法でぶちのめして捕獲し、宝石へと再度封印をするってよ」

逃げ出した霊獣と宝石集めどうのはきいた気がするけども、具体的な流れは今初めて知ったぞ。

「じゃあ、今言った。ほら、ボケボケしてねぇであの蝶々を捕まえに行くぜ、ポニ子！」

「ええー！　せめて着替える時間が欲しいよぉ。出来れば髪を結う時間も……」

「んなノンキに構えてる余裕あるわきゃねぇだろ！」

「は、はう」

どてらだけでもと、羽織ってバタバタ部屋を出て行くゆりなと黒猫を見送り、俺は肩をすくめた。

いやはや大変だねぇ、魔法少女とやらは。

こんな朝早くから出勤だなんてさ。恐れ入るね。

「さてはてと」

ベッドの中へ入り、ぬくぬくと猫のように体を丸める。

うつらうつらとしかけた時――

どすん。

なにかが俺の胸の上に……って、ぐお！

「このやり取りさっきもやっただろ。いーから、おめぇも来るんだよ、バカシラガ！」

二度も踏んでくれやがって。小さい胸が更にへっこんじまうだろうが。

「……小さいもなにも、まな板同然じゃねーか」

「むーっ！　私だって一応女の子なんだからねっ」

頬を膨らませて、言ってみたり。

「わぁった。漫才ならあとでいくらでも付き合ってやるから、マジでもう行くぜ」

呆れ口調で返される。

「へぇへぇ、切羽詰まっているようで」

「放っておいたら、誰かに見つかって大騒ぎになるかもしんねーしな。
それならまだしも、暴れて町を壊されたりなんかしたらもっと厄介だ」

厄災を抱える獣、か。

久々のシャバだ。遊びたくなるのも解る。

やむかたなし。

行くしかないってワケねぇ、どうしても。

第四石：コロナ、シャクヤクと　前編

外に出るとゆりなが今にも泣き出しそうな顔で、

「ど、どうしよう、見失っちゃったよぉ」

せわしなく足踏みをしながら言う。

その足踏みに意味はあるのかと問いたくなるが、その前に黒猫のツッコミが入った。

「あんだと、先に追いかけてろって言ったじゃねーか！」

「だってぇ、一人じゃ心細いんだもん……」

にへへと照れながら、両人差し指の先端を合わせてモジモジ。

なんともまぁ。

現実にそんな仕草をするヤツ本当にいるんだな。

「かぁー、なっさけねぇ」

やれやれと大げさに嘆くクロエ。

「いやはや、それでも天下のグレート魔法少女かィ？」

続いて俺もからかい気味に言ってやる。

「はぅ。ボクは天下でもグレートでもないよ……。
この前なったばっかだし、魔法だってまだ一個しか知らないもん」

そう、うな垂れるゆりなに俺は肩をすくめた。

うーむ。マジメに返されてしまうと、なんとも。

「っつーか、ポニ子を責めてんじゃねぇ、おめぇがチンタラしていたからだろ！」

突如、繰り出された猫パンチがみぞおちにクリーンヒットする。

へそ丸出しルックの今の俺にそれは大ダメージなワケで。

誰だよ、キャミソールなんて防御力皆無なもんを俺様に着させた奴はァ。

「イテテ、こんのバカ猫ぉ……自分だってガーガー言ってたクセに」
「いいんだよ、オレは。ポニ子をイジめていいのはオレだけだ、おめぇにはまだ早い。いささかにな」

ふんぞり返って言う黒猫に、俺とゆりなは顔を見合わせた。
なんだその、好きな幼馴染の女の子にちょっかいを出したヤツに怒り心頭のガキ大将が胸ぐらを掴みながら言いそうなセリフは。

「……よくそんな例え、瞬時に思いつくよな」

それは賛辞として、受け止めておくことにしよう。

「あ、あのぅ……。クーちゃん、蝶々さん追っかけなくていいの？」

と、ゆりなの発言にクロエはハッと思い出したかのように、

「おっと、そうだった。それじゃあここは二手に分かれて探そう。
オレとポニ子は左へ行く、シラガ娘は右を頼むぜ」

「ほい、了解うけたまわりっ！　しゃっちゃん、見つけたら知らせてねっ」

そう言って、そそくさと二人で立ち去ってしまった。

ポツーンと佇む俺の目はきっと点のようになっていたことだろう。

おいおい、ちょっと待ってくれ。一つ疑問なんだけどもよォ。

見つけたら知らせろってさァ、どういった手段で知らせりゃいいんだよ？

心の中で嘆いた後、俺は一人寂しく右の道へと歩を進めることにした。

＋　＋　＋

口笛を吹きながら頭の後ろで手を組み、適当に歩き回ってはみるが――。

「いねぇじゃんよ……」

周りを見渡せど、それらしい蝶なんざ一匹たりとも見当たらない。

トンボや天道虫なら山ほど見かけたけどさ。

「やってらんねぇ」

俺は公園のベンチに腰を下ろして、空を見上げた。

ゆっくりと流れる厚い雲、暖かい陽光。鳥のさえずりが眠気を誘う。

「なーにやってんだろ、俺ァ」

知らん世界に飛ばされて、いきなり知らん道を歩かされて。

魔法少女になれだの、霊獣とやらを捕まえろだの……よ。

これがロボットに乗って世界を救えとかいう、熱い展開ならまだ気は乗らないでもねェが。

――ん？

そもそも、何故俺はあいつの言うことをマジメにきいているんだ。

黒猫の言葉を思い出してみる。

たしかあいつは、

俺が第二の魔法少女となり、あのチビ助と一緒に全ての宝石を集

めない限り、
元の姿および元の世界に戻れないと言ったな。
もしも、それ以外に方法があるとするのならば。
例えば、扉みたいなモノがあって、そこへ入ると現代に戻れるみたいなさ。
そんなもんなくとも、何か情報が掴めるかもしれない。今はちょうど自由に行動出来るし。
あいつらと仲良しごっこをして宝石を集めるなんざ、長ったらしくてやってられんし、それ以上に性に合わん。
「どうせだったら……脱出方法を探ってみるか？」
そう一人呟いたつもりだった。
しかし、その時。
「肯定です。探ってみましょうです」
小さな返事が返ってきた。
ゆるりと視線を下げると、目の前に少女が立っていた。

俺だって今は少女の分類に入るかもしれねぇが、その声の主は更に幼かった。

いいところ五、六才あたりか？

>ｉ１９１９５―１７６１<

今にも眠ってしまいそうなトロンとしたエメラルドグリーンの瞳に、

ペリドットカラーのさらさらツーサイドアップ。

やけに袖の長い園児服のようなものを身にまとった彼女は、一旦視線を彷徨わせたあと、

「肯定なんです」

もう一度、俺をジッと見つめて言った。

こりゃあ。どう見ても俺に向かっての発言だよなァ。

次から次へと――今日は間違いなく厄日決定だ。

第四石：コロナ、シャクヤクと　後編

さてはて。

「あー、外回りで疲れてるんだ。日本のお父さんは忙しくてなぁ。今日なんてまだ一台も契約が取れなくてさ。来週までに三台は取って来いなんてムチャ言うんだぜ、まったくもって、現場が見えてねェんだよなデスクワーカー共って奴ァ。

とまぁ、詰まるところのあっちへ行って一人で遊んでくれると助かるのだよっつう事だ。しっし」

手を振るジェスチャーを見ていないのか、そいつは眠そうな目をパチクリして、

「パパさんなんですか？　ママさんに見えます」

「ママさんって……んな歳でもねぇよ。見てみそ、このピチピチの玉のような肌をよ」

「否定です。コロナのほうがピチピチなのです」

そりゃまぁ、お前さんに比べたら敵わんて。

「ま、んなこたァどーでもいいワケで」

俺は背後にある、カラフルな遊具を親指で指しながら、

「悪ィけれどもよ、チビチビ助。遊び相手なら、そこのジャングルジムさんにでも頼んでくれ」

しかし、そいつは動かずにただひたすらと俺を見つめ続ける。

「あんだよ……。言いてぇ事あるんなら素直に言ったらどうなんでぇい」

「自分はコロナです。チビチビ助ではないのです」

あーそう。

「そりゃあ、すまなんだ。じゃあチョココロネちゃん、そろそろおいちゃんはお暇させてもらうよ」

言って立ち上がり、腰をポンポンと叩いていると、

「コロナです。チョコは入ってませんので、あしからず」

ぼそっと呟き、俺のスカートを掴みやがる。

なんなんだよ。何が目的なんだ、こいつは。

「わかったわかった」

やや乱暴にチビチビ助の頭をグシグシと撫でて、

「あばよ、コロ美！」

そう颯爽と立ち去ろうとするが、一向に前に進めん。

振り返ると、コロナが未だに俺のスカートを掴んでいる。

っつーか、何だこのパワー。ガキんちょの力じゃねぇぞ。

「だぁら、なんだってんだよ！？」

俺が語気を荒げると、そいつは一瞬ビクっとしたあと、

「コ、コロナは……喉が渇いたのです」

指をくわえながら、チラッと公園中央あたりの水飲み場を一瞥する。

「あぁ？　するってぇと、おめぇさん俺にあそこへ連れて行ってもらいてぇのか？」

＞ｉ１９３０３｜１７６１＜

眉をひそめる俺に、コロナはコクンと頷いた。

まぁ、確かに水が出る場所はやや高い位置にあるな。

このチビチビ助なら抱っこしてやらなければ届かないだろう。

それくらいなら――そう考えていると、

「……やっぱ、いいのです。否定するです」

急にそいつは首をぶんぶん振って、俺のスカートから手を離した。

「ごめんなさい、ママさん」

探さないでください、と続けてトボトボと歩き去っていく。

一体なんの心境の変化があったのか。

ま、これで邪魔者は居なくなったな。

邪魔者は――。

その時、俺の頭の中に嫌な思い出がよみがえった。

久しく忘れていた、あの吐き気のするようなやり取りがリフレインする。

「……あー、マジ面倒くせェ」

俺はスカートのポケットを探った。

こちらの世界に召還される前、確か俺はコンビニへと買い物に行くところだった。

そこらへんの記憶が途絶えている為、多分その途中で俺はこちらに召還させられたのだろう。

だから、確信はあった。

「四百円と、ひぃふぅみぃ……三十円か。この世界の自動販売機、日本の金使えりゃいいけど」

俺は小銭をもう一度ポケットに押し込み、

「この俺が、センシティブに」

自分の柄にもない行動に嘲笑しつつ、あのチビチビ助を探すことにした。

＋　＋　＋

程なくしてそいつは見つかった。

そりゃあ、同じ公園内でブランコを一人で漕いでいたからな。

探してくれるなと言う方が無理がある。

「おい、コロ美。行くぞ」

声をかけるとそいつはビックリしたように顔を上げた。

「え？」

コロナの前に腰を下ろす。その時、一瞬彼女が目をつぶったように見えた。

多分、恐がっているのかもしれない。いや、絶対だな。

そりゃあ前の世界では散々恐がられてはきたが……なんだろうな、この胸の痛みは。

ただの成長痛だと思いたいところだがね。

「あぁ、そうか。こうだな」

くるりと回転し、背中を見せる。

「もしかして、おんぶですか？」

「肯定するぞ」

「で、でも」

「乗らねぇなら、今日の営業は終わりだ。

さっき無線で、空いてるようなら三丁目の山川さんを乗せてくれ

って頼まれたもんでさァ」

テキトーに言うと、

「の、乗るですっ！」

そう背中にダイブを決め込むコロナ。

「軽い軽い」

よっこいせとおんぶし直して、立ち上がる。

さぁて、自販機はどこかね。

＋　＋　＋

その後、なんとか自販機でジュースを買えた俺たちは、先ほどの公園のベンチへと舞い戻っていた。

「うめぇーか？」

ついでにと自分の分に買ってきた八十円で二個入りの乳酸菌飲料を呷った後、訊いてみる。

コロナは両手でペットボトルを掴みながら、

「肯定、ガボガボ。美味しい、ガボガボ。れす」

「いや、無理に声を出さんでもいい。こんな公園のど真ん中で溺れ死んでもらっても困る」

しかしまぁ、どんだけ喉が渇いてたのやら。

みるみるうちにボトル内のはちみつレモンジュースが無くなっていく。

やがて、

「けぷ」

と小さなゲップをすると、ペットボトルを下げて、同時に頭も下げる。

「ありがとうです、ママさん。完膚無きまでに幸せでした」

「いささかに間違えているような気も否めないが、まぁ喜んでもらえて何より。
あと俺はまだママって歳でもなけりゃあ、性別でもねぇから。そこんところ宜しくってなもんで一つ」

さて、いい加減に時間を食いすぎたな。あのバカ猫にどやされるのもシャクだし。

そろそろ、ガキのお守りはこれくらいでいいだろ。

「んじゃあ、今度こそあばよチビチビ助」

頭をポンポンと優しく撫で、

「……悪かったな。さっきは恐がらせちまって」

一応言っておく。別に本心ではないからな。

親父に女子供を泣かせるなって言われたからさ、ただそれだけの話だ。

今度こそすんなり帰してくれるだろうと踏んでいた俺だったが、

「ママ、ううん。パパさん」

再びスカートを掴まれ、前につんのめってしまう。

「次はなんだァ？　ションベンに連れてってなんざぬかしやがったら――」

やれやれと振り向くと、

「目、目がピカってる！？」

俺はギョっとして半歩さがった。

なぜならコロナの緑眼がライトのように光っていたからだ。

比喩などの表現ではなく、マジで明滅しているワケで……軽くホラーの領域入ってるぞ、こりゃあ。

「……来てください。渡したいモノがあるのです」

度肝を抜かしている俺をコロナがさらりと促す。

来てください、と言われてもなァ。

「そう仰られましても。
親父に、知らない子供について行ったり、物を貰ったりしたらダメと言われているもんでさァ。
いやはや、色々な意味でね。今のご時世」

と。

おどけて言ってみるが、

「パパさんには無くてはならない、とっても大切なモノです。
お願いです、コロナを信じてみちゃってください。はちみつレモンのお礼なんです」

「そらまたご丁寧に。……どうしてもって、ワケかい？」

首肯を一つ。

「わぁーったよ、そんなに遠くないなら行ってみるさ」

だって。そう言うしかねぇじゃん。

あんな、どこを見ているのかわからないような瞳で、口を真一文字に結んじゃってさ。

逆らったら何をされるか。なんていうのか、アレを感じるぜ。ええとアレは――。

「ぷれっしゃあ」

「そうそう、プレッシャーだ！　って、ちょい待ち。ひょっとしておめぇさん人の心が読めるのか？」

嘘だろ、おい。エスパー少女って奴か？

いや待てよ、もし読めるとしたら。

ふむ。

こいつをさらって一儲けできるかも……いや、その前に帰れないんだっつーの。

「否定しますです。パパさんだから読めるのかもです」

なんじゃそりゃ。俺の心だから読めるって、どういう意味だよ。

俺が首をかしげていると、そいつは無言のまま踵を返してスタスタと歩いて行ってしまった。

「お、おい！　待てってば、コロ美！」

慌ててついて行こうとする俺に、チビチビ助が振り返って、

「あと、コロナのことをお金儲けに使おうなんて考えちゃ、めっです」

そう釘を刺されてしまった。

飛んで喋る猫とエスパー少女、中々良い金になると思ったのだが。

これはこれは。

第五石：その名はレイメイ

「ここなんです」

コロナが言って立ち止まった。

「なんですって、言われてもさァ」

改めて周りを見渡すまでもない。

こんな何処にでもありそうな森のど真ん中で立ち止まられてもな。

もう案内は終わりましたとばかりに伸脚運動を始めたそいつに、

「若いうちからそんな運動してたら、膝痛めるだけだぜ。つーか、ここに何があるってんだい。

そもそもとして、俺に渡したい大切なモノって何なワケ？」

後ろ毛をイジりながら訊いてみると、

「あ。その質問にはコロナがお答えします」

いや、最初からお前に訊いてるんだけどな。

「えと、やっぱり説明するよりこっちです」

言いながらごそごそとポケットに手を突っ込むコロナ。

やがて薄紫色の小さな手紙を取り出すと、俺にホイッと渡して、

「それ、読んで欲しいのです」

ほう。これはこれは。

キラキラに光るハートのシールで丁寧に閉じられている可愛らしい手紙。

とくりゃあ、一つしかあるめぇ。

「いやはやまさか、これは恋文と呼ばれるモノかね」

そんな、からかい気味の俺の発言に、

「肯定。コロナはパパさんに一目惚れしました。
お返事待ってます、そこの伝説の樹の下で。ずっと、貴方を」

と指差す方向には、古びた切り株しか見当たらないワケで。

「コロ美よ。伝説の切り株なら見つけたぞ」

「では、伝説の切り株に座って手紙の内容を口に出して読んでみちゃって下さい」

相変わらず掴めんチビチビ助だ。

とにもかくにもと、腰を下ろした俺は手紙を読んでみることにした。

「ええと。なになに……字が汚くて読みにくいんだが」

「当店ではクレームを一切受け付けておりません。なにぶんまだ幼稚園児の身でして。
お手々があまり言うことをきかないのです」

そりゃあ難儀なこって。

しゃあねぇ、なんとか解読していくか。

「て、天よい舞いあいし、ググツの利子よ今ふだだだび我がもとえ蘇れ――って、どういう意味だコレ」

眉間にしわを寄せながら手紙を舐めるように見る俺に、

「否定です。それは、天より舞い降りし傀儡の石よ、今再び我が下へ蘇れ……と読むのです」

「なぁるほど。天より舞い降りし、傀儡の石よ。今再び我が下へ蘇れ、か。

言われてみればそう読めなくもないな。というか、口で説明したほうがよっぽど早かっただろうに」

そう苦笑する俺に、

「おやおや。パパさん。今、それを口に出して言っちゃいましたね」

急に声色の変わったコロナにビクっとして顔を上げる。

「いよいよ、この時が」

コロナの眠そうな目が見開かれていた。

心なしか口元が笑っているようにも見える。

「ああ、でもまだダメなんです。あともう一言が無いと、アレは孵らない」

な、なんだよ、アレって。

「さぁ、パパさん。『霊鳴』と言ってみてください。さんにーいち、はいアクション」

「……れいめい？」

促されるがままに口を突いて出た言葉、霊鳴。

何だソレ。

つーか、さっきの天より舞い降りしって、もしかして呪文とかいう類の――

「ぶいっ、大当たり」

コロナがVサインを出したその時、頭上が青く光り輝いた。
眩しい光に俺はすぐさま手をかざす。が、何だこの強い光は。
目をつぶっているのにも関わらず、光が我さきにと俺の網膜へ飛び込んで来やがる。

「パパさん、そのまま左手を前に出してみて下さい。何か触れるモノがあると思うです」

何かって。ええっと。

ああ、あったぞ。これか？

ほんのりと暖かい石のようなモノを掴む。

すると、たちまち光が消えていった。

やがて目の慣れた俺は、その石をじっくりと観察してみる。

蒼くて透明な手の平サイズの石。輝き方がガラス細工のそれではない。まさか宝石か？

だが、何と言ったらいいのか。物自体は良いのだが状態がボロっちいのだ。

ところどころに亀裂が走っていたり、赤いコケが付着していたり。

あと、やけに長細い藻屑が幾つも巻きついている。

「……ずっと、冷たい海の底に沈んでいたのです。かわいそうに」

もしかして俺に渡したい大切なモノって、この霊鳴とかいう石のことか？

コロナは頷きながら、

「肯定。正式な呼び名は試作型霊鳴石『弐式』なんです」

へぇ。ご大層な名前だねェ。試作型という部分が、いささかに気にはなるが。

で、この石っころは何の使い道があるんだ？

「それはただの石っころではないのです。さっきの手紙の続き、読んでみちゃってください」

草むらから手紙を拾い、続きを読んでみる。

そこには、コロナの字とは似ても似つかないかすれた文字でこう書かれていた。

「弐式封印解除の呪文をここに記す――イグリネィション」

「イグリ……ネィション」

呟いたその瞬間、天から青い閃光が降り注ぎ、そして俺の手元を包み込んだ。

「な、な、なんだァァ！？」

凄まじい勢いで全身の力が抜けていく。

まるで俺のエネルギーが石に吸い取られていくかのような……待て待て、こりゃ本気で立っていられねェぞ。

ちょちょちょ、いや、マジで、吸い取り過ぎだって――！

＞i21495|1761＜

「あ、あぅう……」

ペタンとすっかり腰が抜けてしまった俺の手の中に先ほどの石の姿はなく、

代わりにヘンテコな蒼い杖が握られていた。

「パパさん、杖の封印解除よくできました」

涙目で見上げた俺の頭をコロナがよしよしと撫でる。

こ、こんにゃろぉお。何がよくできました、だ！

何か文句の言葉でもぶつけてやろうかと思ったその時、

「魔法少女、おめでとー」

と、もう一度Vサインを決めながら更に気の抜けるようなことを言い放ちやがった。

無表情づらのクセに満足げな空気がひしひしと伝わってくる。

上手くしてやったり、ってかぁ？

ちくしょう……。

第六石：対決！ゆりなｖｓコロナ

パキッ。

音のした場所へ顔を向けると、ゆりなが驚いた表情で立っていた。

俺の視線に気付いたのか、そいつは慌てて樹の陰に隠れると、

「つ、つくつくほーし。みーんみーん。ほーほーほっほーっ」

また旧式なとぼけ方を。

つーか最後のそれはセミじゃないだろ。朝によく鳴いてるアレだ、アレ。

「にゃ、にゃはははは。バレちゃった」

「ったく。そんなところでコソコソとよォ」

「わ、ごめんなさい。ついビックリして隠れちゃった。すっごい光が見えたから走ってきたんだけど……。

あのー。しゃっちゃん、もしかしてそれって、杖――だったり？」

おずおずと訊くゆりなに、

「ま、魔法少女……はじめました」

気の抜けたVサインをしつつ、春なのでと付け足して言ってみる。

何故、春だから魔法少女をはじめるのか我ながらよくわからんが。

「ふ、ふぇええええ！　しゃっちゃん、本気なの！？」

本気もなにも。

驚きたいのは俺のほうだっての。

積もり積もった愚痴をぶちまけたいのは山々なんだけれども、その前にちょっと肩を貸してくれ。

こ、腰が抜けちまってさァ。

「う、うん。――きゃっ！」

トテトテと走り寄ってきたゆりなが悲鳴をあげて盛大にズッコケた。

「おーい、大丈夫か？」

「だいじょばなぁい……。しゃっちゃん、足がちべたくて動かないよぉ」

涙目で訴えかけるゆりなの足元を見ると、何やら黄緑色の石が足を固めていた。

「それ、コロナの魔法です。つめた～い、氷なんです」

いやいやいや。

なんです、じゃあないだろ。

「どーいうつもりなんでィ、コロ美。悪ふざけだかなんだか知らねぇが、今すぐ魔法を解いてやれって！」

すると、

「否定。コロナは、今からそこの旧魔法少女さんに宣戦布告します。魔法少女はパパさん一人で十分なんです」

言いながら浮かび上がるコロナに、蝶のような光り輝く羽が生まれる。

おい、マジかよ。もしかしなくても、これって戦闘体勢ってヤツじゃないのか。

「な、なんでそうなるのーっ！？」

俺とゆりなが同時に声を張り上げるが、そいつはあっけらかんと、

「なんでって、何となくです。なんか貴女を見ているとモヤモヤするのです。

とにかく魔法少女はパパさんだけで十分だと判断しました」

ど、どこをどう見て、そういう判断に至ったんだお前は。

俺はただ腰を抜かしているだけだぜ、なんとも情けない話だけれども。

「ま。そゆことなので。さっさと死んじゃってください」

言った直後、

「待てぇええい！　こんの、バカコロナ！！」

凄まじいスピードで飛んできたクロエがチビチビ助の腹へと突進をかます。

不意の一撃にコロナの羽は消え、そのまま地面へと叩きつけられた。

しっかしながら。

止めるためとはいえ、少しやりすぎじゃあないのか。相手は子供だぜ。

「バーロー。姿かたちはどうであれ、オレたち霊獣は、そうやすやすと傷つかないってーの」

「えっ、待て待て。オレたちって事は……。もしかして、お前もあのチビチビ助も霊獣ってヤツなのか？」

俺に続いてゆりなも、

「じゃあ、あの子って朝の蝶々さんなの！？」

顔を見合わせる俺たちの間に黒猫がふよふよと入って、ため息まじりにこう言った。

「い、今更、気付いたのかよ……。あいつは三番石であるエメラルドに封印されていた緑蝶コロナだ。
能力は、『水』と『氷』――見た目はチビガキだが、七大魔宝石のうちの一つだからな。油断は出来ねぇぜ」

そんな情報を一気に詰め込まれても。なんだよ、七大なんたらって。

「どうやら説明している時間は無いみたいだぜ」

クイっと肉球が指す方向にはむくれっ面のコロナがあひる座りで、

「むー、ぽんぽん痛いのです。はちみつレモンが出ちゃいそうです」

こっちを睨みつけていた。と言っても、あの眠そうな目だから迫力は皆無に等しい。

それより、もったいないから出すなよ。

百五十円もしたんだぞ、根性で飲み込め。そしてお前の血となり肉となる。

「肯定です。パパさん。園児のド根性みせます」

なんてお腹をさすりながら口をモゴモゴ動かしているコロナを背に、

「今のうちだ、杖を呼んで戦うぞ。やれるな、ポニ子。足かせの氷魔法はもう解けているハズだ」

ズッコケたままの姿勢でポカーンとしていたゆりながが、ゆっくりと自分を指差して、

「ふえっ。ぼ、ボクがやるの？」

「あったりめーの酢漬けイカ！
このバカシラガは杖はあれども魔宝石を持ってねぇんだ、今やれるのはポニ子しかいねぇ！」

「……はぅ」

いやはや、面目ねェ。

しかし、まぁ。ここは一つ、先輩のお手並み拝見ってことで。
腰を抜かしながらゆるりと観戦させてもらうことにするさね。

「ポニ子の動きをよぉく見ておけよ、シラガ娘。おめぇも遅かれ早かれやってもらうんだからな」

へぇへぇ。わかりましたんで。

「はうぅ、なんか緊張するよぅ。しゃっちゃん、あんまりジーっと見ないで〜」

顔を真っ赤に染めて、ぽりぽりと頬をかくゆりなに、

「あの。巻きでお願いします」

指をくるくる回しながらコロナが言う。

どこで覚えたんだ、そんな業界用語。

「ふぁ、ごめんなさい。も、もしかして待ってくれてるの？」

「肯定。一応、フェアでやらないと楽しくないですから。
あと、コロナは霊獣なので手加減なんてしないでください。本気で来ても大丈夫です。どんとこーい」

それを聞いてホッとしたのか、

「えへへ。そっか、じゃあ全力で頑張るねっ！」

ゆりなはそう言うと、手を高らかに掲げて、

「来てっ、霊冥！」

数秒も経たないうちに、黒い宝石が空から飛んでくる。

呼べば飛んで来るって……今時の魔法少女は進んでるんだな。

そして、それを掴むと同時にゆりなはこう叫んだ。

「イグティレェト！」

黒い光がゆりなの手元を包み込む。

ほほう。これは、また。俺のときと呪文が少し違うようだ。

慣れたもんで、宝石をさっさと黒杖へ変化させると流れのままに、

「クーちゃん、お願いっ」

「あいよっ！」

くるんと空中で黒猫が一回転すると、藍色の宝石へと姿が変わった。

ん――宝石？

さっきこの猫は自分を霊獣と言っていたよな。こいつも七大なんとやらだったりするのか？

するってぇと、七匹の霊獣のうち二匹はこの場に居るってことで……なんだか案外すぐ集まりそうだな。

そんなことを考えていると、

「せーのっ」

ゆりなが杖を両手で持ち上げ、宝石へと勢い良く振り下ろした。

その瞬間、割れた宝石の中から黒い大蛇のような稲妻が発生し、

ゆりなを頭から喰らう。

なんて、迫力だ。予想以上に派手っつーか、コレ大丈夫なのかよ。

クロエが変身した宝石は割れちまうし、ゆりなは雷に喰われるしで。

唖然としていると、ゆりなの全身を覆っていた稲妻が徐々に小さくなっていく。

「お、おお……」

稲妻が完全に消えると、そこには黒いドレスに身を包んだゆりなの姿があった。

さっきまではパジャマにどてら姿だったのに、いつの間にそんな豪華な衣装に着替えたんだ。

藍色に煌めくオーラがゆりなの体を彩り、時たま黒い稲光がバチバチと周りに発生している。

＞ｉ２２４０９―１７６１＜

こりゃあ、嘆声をもらしてしまうのも無理はないって。

なるほどな。これが魔法少女、ってヤツ……ね。

「――お待たせ」

さっきまでの調子はどこへやら。

急に凛々しい顔つきになったゆりなは、杖をブンブンと振り回して、

「行くよ」

息をつく間もなく、跳躍した。

第七石：雷と氷、どっちが強い？

「よーし！　『アイスウォーター』ちゃん、かかってきなさい！」

ふよふよと滞空しながら、

「クロエが魂よ、我に漆黒の雷を宿せっ」

ゆりなが叫ぶと同時に、杖に黒い電流が走った。

何か攻撃を繰り出すのか？

期待をしつつ待ってみるが、

「えーと……しゃっちゃん。それから、なんて言うんだっけ」

「あ、あのなァ……」

ったく、俺に訊くなって。

さっきは少しばかり凛々しい顔つきになったなと思ったのだが、いやはや。

「イカズチ？　憑いてるのはお姉ちゃまなのに。あ、そっか。今回は……」

目は眠そうなままだが、怪訝そうに眉をピクっと動かして、

「分が悪いかもです。だったら、」

自分の手の平に息を吹きかける。

こりゃあ、なにしてんだ？

「ふぅーっ」

おお。見る見るうちに小さな氷のつぶてが生まれていくではないか。

中々に便利そうな魔法ではあるな。夏場とか特にもってこいだ。

いやいや。それよりも。

ゆりなはさっき『アイスウォーター』とコロ美を呼んでいたな。

多分、察するにクロエから教わった異名とかだろう。

氷と水の使い手らしいからな。

氷に、水か……一体どんなエグい攻撃をするんだろうねェ？

「でけた」

やがて完成した氷の塊を握りしめると、コロナが跳躍――いやコレは飛翔と言ったほうが正しいか。

煌めく羽を羽ばたかせて、ぐんぐんゆりなに接近し、

「ほよ？」

ぼけっと見上げたゆりなの服、胸元を引っ張ると、

「ポイ捨てごめんです」

氷を入れた。

「ひやぁあああ！　つめたーいっ！」

……そして墜落するゆりな。

「こ、今度は背中のほうに移動してる！　ひーん、一張羅がビショビショだよぅ」

なんて落ちたあともドレスをばっさばっさやりながら氷を取り出そうと格闘している。

あー……。

すまないが、ちぃっとばっかし言わせてくれ。

「って、なんなんだァ！　この拍子抜けするようなバトルは！
チビ助、お前それでも魔法少女のプロかっ」

「どぅわってー、魔法出すときの呪文忘れちゃったんだもん。それにプロじゃないしぃ」

ぷーっと頬をふくらますそいつに、

「……旧魔法少女さん。呪文は、『ぽよよん、ぽいぽい、ぽん』なのです。
ちゃんと取り扱い説明書の十三ページに載ってるです。予習しとかないと、めっですよ」

若干、呆れた口調のコロナが言った。
つーか取説なんてモンがあるのかい。

「あ。そうそう、それそれ！　ありがとうアイスウォーターちゃん」

「お礼はいいので。呪文でコロナに攻撃お願いします。
ちょっと旧魔法少女さんがどれくらい魔力あるのか確かめてみたいので」

「うん、いーよ。でもちょっと、休憩ね。疲れちゃった」

「……肯定するです。コロナも久々に羽を伸ばして背中が痛いのです」

「にゃはは、霊獣さんも大変なんだねー。
その羽かっくいーけど、肩こっちゃいそうかも」

「それもあるですけど、鱗粉が多い日はかゆくてたまらないのが大変です」

「ふぇ～、そうなんだぁ」

なんてほのぼのと談笑し始めたではないか。

こ、こいつらには緊迫感ってモンが足りねェ。

っかぁああ！　魔法少女ってヤツァ、こんなんでいいのかよ……。

＋　＋　＋

数分後。

「あのよぉ、おめぇさん方、いつまでダベってるつもりだィ？」

痺れを切らし、ため息がてら言ってみる。

すると、コロナがハッとした様子で、

「し、しまったです。危うく懐柔されちゃうところでした。旧魔法少女さんおそるべし。

さぁ、休憩終わりです。はやく魔法どーんと来いです！」

立ち上がり、憤然と両手を広げるチビチビ助に、

「え……うん」

立ち上がり、悄然と杖を構えるチビ助。

足元に小さめの黒い魔法陣が浮かび上がった。

いよいよ、マトモな魔法が間近で見られるな。

彼女は一つ深呼吸をした後、

「ぽぉ～よよん、ぽいぽいー、ぽんっ！　らいらい、『ライトニング』！」

振った杖から、やる気のかけらも感じられない電撃がちょろっと出た。

そいつはコロナを避けるように身をくねらせると、はるか空の向こうに消えてしまった。

なんなんスか今の。

「なーんでィなんでィ、登場は派手なクセに魔法はからっきし、」

俺が言い終えるよりも前に、

「……否定。それ、本気なのですか？」

苛立ちの混じった声に遮られた。

コロナは両手を広げたまま、キッとゆりなを睨みつけている。

あのトロンとした目ではない。

なんか知らんが、口を出せる雰囲気じゃなさそうだ。

「にゃはは。ごめんね、あれがボクの本気なんだよぅ。
まだこういうの全然慣れてなくって」

笑いながら頭をかくゆりなに、

「そんなウソで騙されないです。貴女の素質からして、あんな魔法——。

コロナをバカにしているとしか思えません」

「……ううん、バカにしてなんかないよ。

きっとキミは霊獣さんだから、ボクが本気で雷を出してもへっちゃらだったと思う」

でも、と付け足してゆりなは微笑んだ。

「痛いよね。いくら霊獣さんは丈夫だって言っても」

「……え？」

コロナの服についた砂埃を優しくポンポンと手で落としながら、

「さっきね、お話してて思ったんだ。どうして戦わなきゃいけないんだろう、

こんなに楽しくお喋りが出来るんだもん、きっとすぐに仲良くなれるのになぁって。

クーちゃんからは、霊獣さんはとっても怖いモノだって教わったんだけど……。

そうは思えなかったの、少なくともキミはね」

それじゃあ、あのカミナリは傷つけないためにワザと外したってわけだったのか。

「旧魔法少女さん……」

そう呟くと、俯いてしまった。

おやおや――仕方ねぇな。

ようやく腰も落ち着いた俺は立ち上がって、

「ま。ま。霊獣だの厄災だのっつっても、姿が姿だからなァ。俺様だって、こんなちんちくりんに魔法ぶっ放したくねーし。気が引けるってそりゃ」

コロナの頭をペシペシ叩きながら言ってやる。

「ぱ、パパさん……」

「えへへ。しゃっちゃんの言うとおり、ちっちゃいからっていうのもあるかも。

あと……それとなんだか、キミが無理をしてるような気がしたの」

無理って、どういうこった？

俺が訊くと、ゆりなはうーんと考える素振りをみせて、

「なんていうのかなぁ。

上手く言えないけど、ほんとにアイスウォーターちゃんはボクと戦いたいのかなぁって」

ふぅむ。

確かに、なんとなくモヤモヤするから、で宣戦布告はオカシイよな。

それに死んじゃってくださいって言ったワリには、戦わずによくわからん行動ばかりとっていたし。

「ひ、否定です。考えすぎなのです。

……コロナは、ただ旧魔法少女さんの力がどれだけあるのか確かめたかったのです。

確かめたらすぐにでも貴女を倒すです」

だとよ。

さて、どうするチビ助。

「そっか。でも、ボクはキミに魔法うちたくないし……。じゃ、こうしよーよ！

これからボクが石を集めるときに一緒についてくるの。

近くで魔法を見ればボクの力を確かめられるんじゃないかな」

「それって、旧魔法少女さんと契約しろってことですか？
……否定です。ヤ、なのです」

と、ぷいっとそっぽを向いてしまった。

だが、ゆりなはニッコリ笑顔で首を振って、

「んーん。ボクじゃなくって新魔法少女さんの、しゃっちゃんと、だよっ」

杖で俺を指した。

「おいおい、人を杖で指してくれるなよ。お行儀が悪い……って、えええっ！？」

どどどどどういう意味だ、そいつァ！

俺が困惑していると、コロナがこちらに振り返って、

「それなら肯定です。パパさんとなら喜んでするです。
ふつつかものですが、ヨロシクお願い致しますのです」

丁寧なお辞儀をぶちかましやがった。

いやいやいや、待て待て。

俺にだって選ぶ権利っつーもんが……いや、そうじゃなくてだな。

むしろ、それ以前に魔法使いをやりたくねーんだってェの。

「わーいっ、しゃっちゃん、わーい！　これで杖も霊獣さんもバッチリだね、ぶいっ！」

>i22694|1761<

だね、って言われましても。

「だからよォ、俺は……」

「パパさん。旧魔法少女さんに負けないように、コロナと力を合わせて頑張るです。

えいえいおー、ぶいぶいっ」

こ、こいつら、人の話を聞きやしねェ。

しかも二人してVサインをかましやがって。

それ、この世界で流行ってるのかよ。

……いやはや。しかしながらに。

いよいよマズいかもしれないな、このままだと……。

第八石：魔法少女なんて絶対になりたくない！

今晩はゆりなの家に泊めてもらうことになった。

っつーか、帰る家はあれども帰り方がわからねェからな。

しばらくは厄介になるしかあるめェ……チビ助の家の人が承諾してくれればの話だけれども。

「ふぁー……。もうお日様沈んじゃいそうだね。
今日はいっぱい歩き回って疲れちゃった」

「へへ。甘いぜ、ぽに子。これからは、もっと動き回ってもらうことになるからな。
覚悟しておくんだぜ」

「おっけー。どーんとこーい！　だよっ」

なんていう話をしている黒猫とゆりなの後ろに、両手を後ろ頭に組んでの俺。

そして、その後ろには、

「パパさん。コロナも何かパパさんとお話したいのです」

「……」

「あ、あんなところにＵＦＯが！　パパさん、ＵＦＯっ。未確認飛行物体なのです。
パパさん知ってましたか、ＵＦＯの略は『うっそー！？　フライング……お盆？』なんです」

「……」

「間違えたです。さっき飛んでたのはペヤングのほうでした。
かやくを麺の下にしてお湯を入れると、かやくが蓋につかなくて美味しいアレです」

よちよち着いてきながら一人盛り上がってる園児。

やれやれだな。

このガキんちょと俺様が契約ねェ……子守の間違いじゃあねぇのか。

ほとほと頭がイテェぜ。

「否定。まだ正式な契約は結ばれてないので、パパさんはただいま不完全な魔法少女です。
でも、簡単なんです。ちょっと呪文を唱えて頂ければ、すぐにでもコロナはパパさんのものなのです。
あ、どうせなら今歩きながら済ませちゃうです。えっと――」

なんだ、こいつと契約を結ばない限り、俺は魔法使いじゃあないってことか。

……そいつはァ、良いことをきいたぜ。

ごそごそとポケットから何か（きっと呪文が書かれたメモだろう）を取り出そうとしたそいつに、

「ざけんなっ、魔法少女なんて誰がやるかってんでぇい！
耳の穴かっぽじって良く聞きなァ。
はっきり言うぜ、俺はおめぇさんと契約する気なんざ微塵もありゃしねぇ！
そこんところ宜しくってなもんで一つ、よしなにィ！」

＞ｉ２３６４９―１７６１＜

すごんだ俺に、コロナはしゅんと肩を落としてしまった。

とぼとぼついてくる姿に若干だが言い過ぎた感が否めないが、い

やはや。

だって、やりたくねーものはやりたくないんだからさ。

……しょうがねぇじゃん。

しばらく歩くと、やがてゆりなの家の前に到着した。

「えへへ。ほいじゃあ、しゃっちゃん、アイスウォーターちゃん。ちょっち待っててね。
お姉ちゃんに、お泊り会しても大丈夫か訊いてみるから……うわーいっ！」

そう言って元気に家の中へ突撃していくチビ助。

お泊り会っつーか、一日だけじゃあいささかに困るんだが。

明日にでも元の世界に戻れる方法が見つかれば話は別だけれどもよォ……。

俺だって別に好きで居候したいワケじゃねェし。

――ん？

お姉ちゃんって、フツーこういう事は母親か父親に了承を得るもんじゃないのか？

首をかしげていると、急に扉がバンッと開いて、

「あらあら、まぁまぁ！　なんて可愛らしいお友達なのでしょう……っ！

天使さんたちなのですっ、欣喜雀躍ですっ！」

何とも大げさな人が出てきた。

セーラー服の上にエプロン、片手にはお玉といった姿の女性。

背格好や服を見るに、おそらく高校生くらいだろう。

ゆりなと同じ長い黒髪を後ろで縛っており、目はパッチリとしていて大きい。

大きいといえば、胸がすさまじいド迫力だ。

ははは……俺らとは雲泥の差だねェ、こりゃ。

「お姉ちゃん、この子がシャクヤクちゃん。ボクはしゃっちゃんって呼んでるのっ。

今日泊まってもいーよね」

「えーと、はじめまして、シャクヤクといいます。恐縮ですが今日一日どうか……」

言いかけたところで、ゆりなのお姉さんが俺に抱きついてきて、

「あらあらっ！　白くて小っちゃくて、ふわふわな柔らかい髪が可愛らしいですっ！
もちろん、承知なのですっ」

頭を撫でながら言った。

了承はまことに有難い話だが、ちょいとばかり苦しいぜ旦那ァ……息ができねェ。

「わーい！　でね、この子がコロナちゃん。小っちゃいけどとってもしっかりしたお利口さんなのっ。
今日泊まってもいーよね」

「あ。コ、コロナと申しますのです。よよよ、よろし……」

お姉さんは、パッと俺から離れると、

「まあまあっ！　もっと小っちゃくて、ぽよぽよな柔らかほっぺが可愛らしいですっ！
もちろん、承諾なのですっ」

今度はコロ美に抱きついて、頬を指でつんつん突きまくりはじめた。

「わーい！　あ、あとついでに。この猫ちゃんは段ボールで捨てられてたから拾ったの。
今日から飼ってもいーよね」

おいおい、おめェさん捨て猫扱いされてんぜェ？

俺がクロエに耳打ちをすると、一瞬だがこちらを睨みつけ、

「にゃ、にゃぁーん」

ただの猫に徹した。

お姉さんの足にすり寄りながら、必死にゴロゴロと喉を鳴らしている。

ああ、そうか。彼女は一般人だから喋って姿をバラしたらまずいってワケか。

だが、いくらなんでも。友達を泊まらせるのと、猫を飼うのとでは話が別だろうに。

そう簡単に了承なんて――

「承允なのですっ！」

って、オイィィ！

彼女はそれだけ言うと、クロエを抱き上げ、子供をあやすかのようにゆらゆらと揺らし始めた。

「ねーんねーん、ころーりーよ。おこーろーりーよー」

なんとも、まぁ……なぜ早々に寝かしつける作業に入ったのか。

よくわからんが、一つ言えることは、この姉にしてこの妹ありってところだな。

肩をすくめて、ついコロナと顔を見合わせてしまった。

「パ、パパさん。コロナはびっくりなんです。ほっぺがへっこんで戻ってこないのです」

うるうると涙目のコロナに、

「……俺も。自慢の髪が世紀末だぜ」

何故かモヒカンヘアーになっている髪を戻しながらの俺。

しかたあるめぇ、これも宿代と思いねェ。

「にゃはは、やったね二人ともっ！　ささ、ボクの部屋に直行っ」

ゆりなが、げんなり表情の俺たちを家に押し込みつつ、

「うっわーい！　お姉ちゃんありがとう、だーい好きっ！」

と、言った。

そしてそのすぐ後に、

「お姉ちゃんもなのですよーっ。

あ、ゆっちゃん。お部屋に行く前にちゃんと手を洗ってくださいねー」

そう、のんびり口調で返ってきた。

＋　＋　＋

「だーっ、疲れたぁ」

「だーっ、疲れたんですぅ」

部屋に着くなり、ベッドに寄りかかって俺とコロナが盛大なため息をついた。

もちろん、手はちゃんと洗ってきたぜ。

よくわからんゴシゴシの歌なんてもんを歌わされながらな。

「ふぇ？　しゃっちゃん達、さっきまで元気だったのに、どーしたの？」

「さっきまでは、な」

ゆりなの頭上に浮かんだハテナマークを手でかき消しつつ、

「いいのかよ、こんな簡単に承諾して。俺たちもそうだけど、クロ

エの件とかさ。
お姉さんお人好しすぎやしねェか？」

「でも、あの方のおかげでコロナたちは屋根のあるお家でグッスリ眠れるのです。
感謝感謝なんです」

そりゃあ、そーだけれどもよォ……。

いつもあんな調子なのかい？

「うん、お姉ちゃんはいつでも誰にでもあんな感じで、とーっても優しいの。
ボクの自慢のお姉ちゃんなんだよぅ。はうー」

なんて周りに花を咲かしている。

「ふぅん、羨ましいこって。俺は一人っ子だからよォ。
あ、一応お父さんやお母さんに改めて了承を得たほうがいいかもな。
やっぱり一家の長が知らねェってのはマズイと思うしさァ」

そう言うと、一拍置いてゆりなが力なく笑った。

「……にゃはは。ウチ、お父さんもお母さんもいないの。
今はボクとお姉ちゃんの二人暮らしなんだ。だから二人とも伸び伸び過ごしてもらってヘーキだよっ」

「あ……。す、すまねぇ。余計なこと言っちまって」

頭を下げると、

「う、ううん！　いないって言っても、お仕事の都合で海外に行ってるだけだからっ。
ごめんね、しゃっちゃん。ヘンな心配させちゃって。あはははっ」

とは言うけれども、寂しいのには変わりないだろうに。

どちらか片方ではなく、両親そろって海外なんてな。いったい、どんな仕事なのだろうか。

だが、ゆりながあまりにもカラカラと笑うモンだから、

「そっか。わりい、わりい」

俺もつられて一緒に笑ってしまった。

すると、コロナが笑いあう俺たちを不思議そうに交互に見て、

「二人とも、何を謝ってるのですか。楽しそうです、コロナもごめんねゴッコしたいのです」

なんて言うもんだから、またおかしくなって二人で笑ってしまった。

＋　＋　＋

「……おめぇら、楽しそうだな。オレがひどい目に合ってるっつーのによぉ。

ったく、あの嬢ちゃん加減ってもんを知らねーのか」

部屋に転がり込んでくるや否や、開口一番グチを放つ黒猫。

「加減って、何かあったのですか。お姉ちゃま」

コロナが訊くと、クロエは気だるそうに肉球で自分の肩をポンポンと叩きながら、

「おぅ、コロ助。よくぞきいてくれた。あの後、何十もの子守唄を歌いやがったんだぜ。
それも近所に聞こえるバカデカい声でよぉ……恥ずかしいったらありゃしねー。
こちとら睡眠通り越して永眠する寸前だったってーのに、おめぇらときたら――」

俺とゆりなの驚愕顔に気づいたのかクロエはびくっと毛を逆立てて、

「あ、あんだよ、そのツラは」

「だって、ねぇ。しゃっちゃん聞いたよね？」

ゆりながひきつった顔で俺に振る。

「……あぁ、聞いたぜェ。しかと聞いたぜェ～」

そう。

コロ美は先ほど確かにコイツのことを『お姉ちゃま』と呼んだ。

腕を組み、うんうんと頷いて俺はこう言った。

「クロエ、おめぇさんって野郎は……まさかメス猫だったとはなァ！
へそが茶を沸かすとは、まさにこの事よォ」

続いてゆりなも、

「クーちゃん、かわいーっ！　メスだったんだぁ。
わーい、メス猫メス猫ー！　メス猫クーちゃんっ」

そうはしゃぐ俺らに、

「にゃあぁあ！　メス猫って言うなぁああ！
侮辱の言葉だぞ、てめーら無邪気にもコノヤロー」

いやはや、言動があまりにも荒々しいもんで。

まさか、メスだったとはな……いささかに信じられねェぜ。

「だから、確かめる必要があるってなもんで」

言って、グイッとばっかしクロエの足を広げた俺に、

「ば、バカっ！　あにすんだよっ！」

すかさず肉球フックが飛んできた。

「いっひっひ。てめぇだって、さんざん俺の事からかってくれただろ。

そのお返しってだけの話さ」

頬をさすりながら言ってやったが、どうやらマジらしいな。

この反応――ま、別に本心としちゃあどっちでもいいことなんだが。

「うん、どっちでもクーちゃんはクーちゃんだもんね。

あはは、でもなんだか可愛いかも。女の子なのに『オレ』だなんてっ」

ゆりながクロエを高い高いしながら言い、

「可愛いかぁ？　女ならせめて女らしく。

もっと、可愛げのある言葉づかいにした方がいいぜ、いささかによォ」

持ち上げられた黒猫の喉をポリポリかきながら俺が続ける。

対して黒猫は、『けっ！』と尻尾をおったてて、

「おめーらだけには、ぜってぇええ言われたくねぇセリフ！」

と、怒鳴った。

……そりゃまぁ、ごもっともで。

第九石：お風呂は命のなんとやら

しばらくの間、くつろいだ後、

「あ、そーだ。今日はお姉ちゃんがご飯の当番だから出来上がるのに少し時間かかるかも。
その前にお風呂入っちゃわない？」

ゆりなの提案に否定するものなどおらず、みんな一様に首を縦に振る。

「へへっ、今日は飛びまくって汗だくだからなぁ。
とっとと、さっぱりしてぇーぜ」

「肯定。コロナも汗かいちゃったのです。ベトベトなんです」

俺も二匹の霊獣に続いて、

「お、いいねェ。風呂は命の洗濯って言うしな。
俺も入らせてもらうとするよ、慎ましくさ」

さて、そこで問題になるのは誰が一番風呂を獲得するのか、であろう。

まぁ。ここはやはり、主であるゆりなで決まりだろうな。

となると、二番手は誰が入るのかという話になるのだが――。

「お風呂だお風呂だ、わーい！　みんなで一緒にお風呂だ、わーいっ！」

ん？

ベッドの上でぴょんぴょん跳ねるゆりなを見上げて、

「ちょい待ち。
みんなで一緒って、どういうこった。銭湯にでも赴くってことかィ？」

そんな俺の質問に、

「んーん。
ボクとクーちゃんとしゃっちゃんとアイスウォーターちゃんの四人でウチのお風呂入るの」

あっけらかんと答えるチビ助。

「いやいやいや、忘れてくれるなよ。俺は男だぜ！
姿はこんなチンチクリンになっちまったけど、中身は超が付くほど男なんだってーの」

「ふぇ？　知ってるけど、それがどーしたの？」

そ、それがどうしたのときたもんだ……。

こいつはァ、手ごわい。

「え、えーとだな。つまるところの……そうだ、俺は他人と一緒に風呂入るのが苦手なんだよ！
なんつーか、こっぱずかしくてよォ」

「ふーん？　ボクは全然恥ずかしくないけどなぁ」

まだ小学生だとはいえ、ちったぁ恥ずかしがってくれよ。

それに四人でなんて窮屈だろう、ゆっくり疲れもとれないぜと付け足すと、

「それもそーだね、ボクん家のお風呂あんまり広くないし。にゃはは！」

いやぁ、まいったまいったと笑うゆりな。

どうやら何とか説得できたみたいだな。やれやれ。

ホッと息をついてる俺に、

「それじゃあ、もう沸いてると思うからしゃっちゃんから入ってきていいよ」

「え、俺からでいいのか？」

「うん、だって今日はしゃっちゃん感謝デーだもん！」

なんだよその、うさんくさいデーは。

クスっと笑った俺に、

「えへへ。気にしないでいいよ、ボクとクーちゃんは後から入るから。

観たいテレビあるし……ねー、クーちゃん？」

そう頭上の黒猫に確認をとるゆりな。
黒猫は、あくびをしつつ気だるげに、
「……ああ、そうそう。オレ達は観たいテレビがあるからよ。ゆっくり入ってきな」
なんとなくだが、クロエは反対すると思ったんだけどな。そんなに面白い番組をやってるのか？
この世界のテレビ……どんなものなのか、いささかに観てみたい気もするが、いやはや。
ここは有難く一番風呂をいただかせてもらうことにしよう。
「んじゃ、お言葉に甘えてさっそく入ってくるぜ」
「うんっ！　お風呂は階段を下りてすぐ左だよ。わかんなかったらお姉ちゃんに訊いてね。バスタオルとお着替えはちょっとしてからボクが持っていくからっ」
何から何までわりぃなと言うと、ゆりなはニッコリ笑顔でVサイ

ンを繰り出した。

＋　＋　＋

脱衣所に着いた俺は、服を脱ぎつつ、

「ちっ、使いづれぇ体だぜ、まったくもってよォ」

改めて自分の変わりすぎた姿に嘆息した。

筋肉皆無な白く細い足はフラフラするし、手は言うことをイマイチきいてくれない。

イマイチってどんな感じかって？

グーとパーを繰り返し出してみるが、頭に描くスピードと反応が大きく違う。

気持ちだけが先に行って、体が追いついてこないって感じかねぇ。

そういやコロ美のヤツも似たようなこと言ってたっけか。

ぽこっと出た腹をベシベシ叩きながら、

「あーあ、俺様の美しく割れた腹筋が跡形も無い……。
こんな体、とっととオサラバしてーぜ。だりいったらありゃしねェ」

風呂の引き戸を開くと、けっこう大きめな浴槽が目に入った。

「ほー。こりゃ、また中々に。俺ん家の風呂よりデカくてキレイだな」

とりあえずサクっと体を洗って湯船につかる。

＞i25743―1761＜

「こりゃあ、イイ湯だぜェ……」

最初は他人の風呂を使うなんて、と気が引けたが、入ってしまえば遠慮よりも快楽が勝っていた。

「しみじみ飲めば～っと、くりゃあ」

そう俺が気持ちよく歌い出したときだ、

「それ以上は歌っちゃ、『メッ』なのです」

ジーッと風呂の戸から顔だけ出して言い放つオリーブグリーンのツーサイドアップ。

「なーにしてんだァ？　そんなところで」

「……」

無言。

その瞳からなんだかキラキラな星が飛んできたりもしていたが、そいつを全て鼻息で打ち落とし、

「あいわかった。歌わないから、早く出て行っておくれ」

「……」

それでも無言のまま意味ありげな視線を送ってくる。

「ほれほれ。もう用は済んだんだろ？　あっち行った、しっし」

俺がからかい気味に言うと、そいつはあからさまに肩を落とした。

「……肯定です」

戸が閉まった。

が、うっすらとガラス戸を通してコロナの影が見える。

しょんぼりと座っちまって、まぁ。

こりゃまた、まったく。わかりやすいチビチビ助だ。

「おーい、コロ美。一緒に入りてーなら、素直にそう言ったらどうなんでぇい」

俺が呼びかけると、待ってましたといわんばかりに戸が開いて、

「やっぱり、パパさんは優しいのです。コロナはもうすでに準備開始してました。ほどきほどき」

髪を解きながら、クール面の園児が現れた。

へぇへぇ、そりゃどーも。

苦笑しつつ俺が頭に乗せたタオルを絞っていると、そいつが浴槽に入ってこようとした。

「おいおい、おめぇさん。ちゃんと体を洗ってから浴槽につかりなァ」

よじ登ってくるコロナの頭を押さえつけながら言うと、そいつはぶーっと頬を膨らませて、

「はやく一緒に入りたいのです。体は後から洗うです」

「それは否定、ってやつだ。浴槽は家族みんなで使うもんだからな。なるべくキレイな状態で次の人に回してやらなきゃいけねぇ。ま、親父の受け売りだけど。

それに、こちとら風呂を借りてる身だし、尚更だろうよ」

びっくりしたように俺を見るコロナに言葉を続ける。

「それがイヤなら、一緒に入るのはナシだ。さてはて、どうする？」

意地悪くニヤリと笑ってやる。

すると、そいつはぶんぶんと首を横に振って、

「……やだ、パパさんと一緒に入るです。ソッコーで洗うんですっ」

「いっひっひ。良い子だ」

せかせかと夢中で洗う小さな背中を見ながら俺は思う。

こんな子供が『霊獣』だなんて厳かな名前を担いで。

まだまだ甘えたい盛りのただのガキんちょに見えるが……。

そして――。

湯船に映る見慣れない少女の顔に、

「おめぇさんは魔法使いだって、さ」

小さく呟いて、俺は水面を指で弾いた。

第十石：魔法少女の取扱説明書？

「ふあぁ～。疲れた体に染み渡るんです、これがまた」

湯に浸かったコロナが年寄りのような声をあげる。

「おめぇさん。言いにくいんだけれども、なんで俺の上に座ってやがるんでぃ。

これじゃあ足を伸ばしてくつろげねぇぜ」

あぐらをかいた俺の足の上に、ちょこんと正座をしているそいつに言うと、

「そのまま座っちゃうと溺れちゃうんです。結構ここのお風呂深いのです」

「なら、立ったまま入りねェ」

「否定なんです。それだと、ゆっくりくつろげないです」

おい。今まさに俺がくつろげてない状態なんだが。

「……じゃあ、飛びやがれ。羽出して、ちぃっとばっかし浮きながら浸かりゃあいい」

「それは名案なんです。
でも羽を出すとき『うんしょ』ってリキむので、もしかしたらちょっとだけ出ちゃ、」

言いかけたところでコロ美をひょいっと抱き上げ、

「わーった、わーったって。きたねー。
俺の上に座ってもいいから、くれぐれもふんばらねェでおくれ」

「肯定。……えへへ」

嬉しそうに人の足の上ではしゃぎやがって、このチビチビ助め。

わざと、ああいうこと言いやがったな。

いやはやに。これじゃあ疲れが取れるどころか、増してしまう。

次は絶対一人で入ろう、変なオプションは抜きだ――そんなことを考えていると、

「パパさん。つまんなそうです」

悲しそうな目で俺を見上げながら、

「コロナと入るの、楽しくないですか？」

一瞬ぎくっとしたが、ここはハッキリと言ってやった方がお互いの為だろうさ。

「つまるつまらないで言えば、つまらないかもねぇ。
あーあ、出来れば一人でゆっくりノンビリと浸かりたかったぜ」

まぁこんなところか。

ちと、厳しく言い過ぎたか？

チラリと横目でチビチビ助を見やるが、そいつはあっけらかんとした様子で、

「それなら暇つぶしになるものを出すんです」

湯船から左手を突き出し、指パッチン。

＞ｉ２７８２２｜１７６１＜

すると、ポンッという音と共に何やら冊子のようなものが出てきた。

黒い表紙に、青の蛍光色で『弐式所有者専用』と書かれている。

「あんだァ？　ゲームか何かの説明書みたいだが」

不思議がる俺に、

「これは魔法少女の取扱説明書なんです。
いずれ成る魔法使いの予習がてら、暇つぶしに最適だと思ったのでご用意したのです」

ああ、これがあのとき言っていた取説か。

結構薄っぺらいんだな……分厚くても困るが。

「ま、やるつもりはねーけれども、暇つぶしに読んでみるとするかねェ。
ええと、なになに――」

それには七つの項目があり、それぞれこんなことが書かれていた。

其の壱――霊鳴石について――

霊鳴は呼べばいつでもどこでも飛んできます。
弐式における封印解除の呪文は『イグリネィション』です。

其の弐――魔法使用について――

弐式所有者の魔法を使うときの呪文は、
『ぷゆゆんぷゆん　ぷいぷいぷう』となります。
慣れれば簡略化することもできますが、最初のうちはなるべく全て唱えましょう。

其の参――使用限界について――

霊鳴の中に入ってる霊薬という液体がなくなると魔法が使えなくなります。
もし使用中になくなった場合は海に戻すか、使用者の心身を休ませてください。
なお、なくなったままの状態でも魔法は使えますが、
生命エネルギーを著しく消費しますのでオススメできません。

其の肆――魔宝石について――

魔宝石には二通りあります。
強力な七つの大魔宝石とイミテーションと呼ばれるたくさんの模造魔宝石です。

其の伍――禁止魔宝石について――

七大、模造問わずどれも魔宝石には様々な能力が秘められていますが、
中には絶対に使ってはならない禁断の魔宝石もあります。
例として治癒系の魔宝石は全て禁止魔宝石にあたります。

其の陸――注意事項について――

他人に正体を知られてはいけません。（ただし魔法関係者を除く）
魔法使いであるということをバレないように周りに注意して魔法を使ってください。

其の漆――集束について――

「……ん？」

そこまで読み進めて俺は頭を傾げた。

其の漆（読めねェ）という項目が、説明が無くまったくの白紙だったからだ。

「おい、コロ美。ここ何も書かれてないんだが。どうなってやがるんでぃ」

両手で湯をすくってひたすら俺の鎖骨にぶつけるという、謎の一人遊びを楽しんでいるコロナに訊ねてみると、

「それはまだナイショなんです。いつの日か文字が浮き上がってくると思うんです」

「あーそう。ま、別にどーでもいいけれどもよ……っと！」

とりあえず反撃に、手で水鉄砲よろしくお湯を飛ばしてやる。

「わっぷ。鼻に入ったです、ツーンと痛いんです」

「いっひっひ。ざまぁみそらしど」

と言いつつ、湯船からあがり髪を洗う作業にとりかかるが……ど

うもあの説明書が引っかかるワケで。

説明はからっきし頭に入ってないからどうでもいいのだが、それよりも『説明書』自体がいささかにねェ。

確か、ピースが保管していたパンドラの箱が手違いでゆりなのもとに送られたんだっけか？

んで、それを開け、中の宝石を飛ばしちまったゆりながそれを集めることになった――魔法使いになって。

つまりそれは偶然の事故ってこった。それなのに、説明書って。フツーそんなもん無いだろうよ。

用意が良すぎるっつうか、これではまるで――

「パパさんの考えてること面白いんです」

シャンプーをシャワーで流しつつ見上げると、コロナが無表情で俺を見下ろしていた。

「面白いってどういうこってィ。つーか、あんまし俺の心を読んでくれるなよ。

いささかに困るぜ」

そうリンスのボトルに手をかけた瞬間、

「……パパさん、一ついいですか」

また声色が変わりやがった。

もしかしたらあの時のように目も光ってるのかもしれないが、無言でリンスをひねりだす。

見ていて気分のいいツラじゃねぇし。

「あまり深く考えないほうがいいです。
パパさんは、旧魔法少女さんと一緒に散らばった石をただ回収する、
ただそれだけのお話なんです」

リンスを前髪にちまちま塗りこみながら、

「……恐縮だけれども、俺をそんなに買いかぶってくれるなよ。
別になんにも考えてなければ、宝石集め云々も興味ない」

本音だ。

魔法少女？　誰がそんなモンをやるかって。素質があるか知らねェが、俺じゃなくてもいいだろ。

そう、こいつらとの仲良しごっこなんざさらさらゴメンだ。いつまでもピーチクやってられねェ。

俺は明日にでも元の世界に帰る方法を見つけて、とっととこの世界からトンズラを決め込む。

テメェらの世界はテメェらでなんとかしやがれ、ってヤツ。

「果たして、そう上手く逃げられるですかね」

コロナがくすくすと笑いやがる。

こいつ、目がピカると性格ちょっと悪くなってねーか？

これはこれは、修正しないと。ケツは若いうちにぶてってな。

「うるへー。チビチビのクセに生意気だっての。

おしおきが必要だねェ、まったくもって」

言って立ち上がり、

「……ほへっ？」

ビックリしているコロナを抱き上げてお風呂椅子にストンと座らせる。

「覚悟しろってなもんで、一つ」

シャンプーを出して、わしゃわしゃと乱暴に髪を洗ってやる。

「わわ。パ、パパさん激しいです」

「ほーれほれ」

「きゃっきゃ！　そこは脇です。く、くすぐったいんです」

ま。

所詮はガキんちょだと思いたいところだが。

こいつの言動抜きにしても、やはりどうも不明瞭な点が多すぎるな。

深く考えるな、とは簡単に言ってくれるが魔法使いになっちまったら深く考えざるを得ないだろうよ。

だから、これ以上面倒なことになる前に本当に逃げ出さねェと。

――明日が勝負だな。

第十一石：ｖｓ第六番模造魔宝石ホバー・ザ・ルヒエル編

「九十八、九十九……百、なんです。パパさん言えたですっ」

「よーし、エライエライ。んじゃ、そろそろあがるぜェ」

そう風呂からあがった俺達の前に、

「むぅー……」

現れたるは、ふくれっつらのゆりな。

そいつは抱えていたバスタオルを不機嫌そうにボフっと俺に渡して、

「しゃっちゃんさー、他人と一緒にお風呂入るのイヤなんじゃなかったのぉ？」

ジトっと見つめられ、いくらか気圧されたが俺は体を拭きながらこう言った。

「あ、ああ。そりゃあ苦手だけれども。

どしたんだ？　ロボロフスキーハムスターみたいに頬を膨らませちまってさァ」

ゆりなのほっぺたを指でつんつん突くと、そいつは反抗的にますと膨らませつつ、

「だってだって！　アイスウォーターちゃんと一緒に入ってたじゃん！
ボクだって、しゃっちゃんと一緒に入りたかったのに……ずるいもん」

これはこれは。何かと思ったら、そんなことか。

別に俺は一人で入るつもり満々だったワケなのだが。

ま。ここは一丁、宿主のご機嫌を伺っておくことにするかね。

ぷいっとそっぽを向いてしまったゆりなに、

「んな、怒るなって。
……じゃあ、ほら。明日はおめぇさんと一緒に入るっ！　これでチャラって事で一つさ」

とかなんとかテキトーに言っておけばいいだろう。

どうせ明日には、この家から（というかこの世界から）出て行くワケだし。

すると、予想通りにそいつはケロっとした笑顔でこちらを向いて、

「わーいっ！　しゃっちゃんと一緒にお風呂ー！
絶対だよ、約束だもんねっ」

そう言って、小指を突き出してきた。

「指きりげんまーん」

こりゃまた、懐かしいっつーか。そんなのやるの小学生のとき以来だぜ。

って、いまの俺はそんくらいのガキんちょだったか。

なら、ガキはガキらしく振舞おうじゃあねェか。

「へいへい。わーってるって。――約束、な」

俺も小指を出してゆりなの指に絡める。

「指きりげんまん！　ウソついたら、」

流れのままフツーに針千本のーます、と続けようとしたのだが、

「雷千発ぶっぱなーす。はい、指切った！」

「ちょ、ちょ、ちょい待てって。切るな切るな。
針千本だったらまだしも、雷千発っておめぇさんが言うと急にリアルすぎるんだが、おい！」

そう慌てる俺に、ゆりなは八重歯をキラっと光らせ、意地悪そうに、

「にゃはぁ？　どーして慌ててるのかなぁ。
しゃっちゃんが、ちゃーんと約束守ってくれればイイだけの話じゃあん」

＞ｉ３００８４―１７６１＜

ウッと、たじろいた俺に今度は後ろのチビチビ助が、

「あのですね、旧魔法少女さん。パパさんはさっきお風呂でこう叫

んでたんです。
ふははは！　明日にでもこの世界からとんずらバイバイするんだゼェ！
どぉれが魔法使いなんてやるんだゼ！　あばよ、このペチャパイキングダムがァァァって。
一体、パパさんどうしちゃったのか……コロナはビックリなんです」

お前が一体どうしちゃったんだよ。

つーか、そんな怪しげな語尾つけた覚えねぇぞ。

「ひっどーい！　しゃっちゃんだってハイパーぺったんこじゃん！」

ハイパーぺったんこて。

そんな使い方されるとは、ハイパーも思いもよらなかったろうに。

「いやはや。今の話のツッコむべき所は胸のことじゃあ無いと思うのだけれども。
ていうかだな、コロ美。おめぇさん変な話しないでくれよな。誤解しちまうだろ」

言うだけ言って、我関せずとばかりにゴシゴシと、

ジジイの乾布摩擦よろしく体を拭いているコロナに苦言を呈してみるが、

「変な話もなにも、ホントのことなんです。
パパさんはコロナたちを見捨てて逃げる気まんまんだったのです」

ち、ちぃっとばっかし言い方に刺々しさが感じられるのは気のせいかね。

「えーっ！？　しゃっちゃん、霊鳴呼んだとき『魔法少女はじめました、春なので』とか、
『ここは一つ、先輩のお手並み拝見ってことで』とか言ってたから、やる気あると思ってたのにっ」

「んな、四ヶ月も前の話を蒸し返されてもよォ」

「今日のお話だもん！」

「大体さァ、おめぇらがコロ美と俺を契約させるうんぬんで盛り上がってるとき、
ちゃーんと俺は魔法使い自体をやりたくねぇって抗議してたんだぞ」

「そ、そんなの聞いてなかったもん……。ぶぅうう」

「ったく。ほれほれ、若いのにそんな顔すんなって。
眉間にシワを寄せる度に幸せが逃げちまうって親父が言ってたぜ」

グリグリとゆりなの眉間を指でこすってやる。

「そんなのより、しゃっちゃんが逃げちゃうことのほうが大問題だよっ」

幸せを、そんなのよりって言い切ってしまうなんて。

なんていうか、こういうところが子供だねェまったく。

と、肩をすくめて苦笑いしていた俺に、

「――幸せなんて、そんなので十分だもん。いらないもん。
しゃっちゃんが一緒に居てくれる方が絶対いいもん」

そう言って俯くチビ助。

こりゃあ……冗談を言って逃れられる雰囲気でもないか。

まぁ、何故だか気に入られているようで悪い気はしないのだが、

だからといって付き合う義理もない。

一日や二日の旅行とは違うんだ。

何が起こるか分からないし、いつ終わるかも分からない魔宝石集めなんざ、正直やってられん。

いつまでもこの世界にとどまって、親父に心配かけたくねェし。

中学のダチに会えなくなるのもキツイ。返してもらってないゲームもあるしさ。

そういやケンカでケリをつけてねぇヤツもいる。（ただいま四勝五敗）

負け越しのまま逃げたら、あのヤローになんて言われるか。

そんなこんなで、俺もいささかに忙しいワケで。

なーんて、ガキのこいつに言ってもピンとこないだろうさ。

だから、俺は少々強引だが子供相手に納得させるためにはこれがベターだと思い、こう言った。

「悪ィけれども、俺にも色々事情があるんだって。

おめぇさん方が切羽詰ってるっつーのは、よぉくわかるけれどもよォ……。

ま、あんまり『ワガママ』言わねェでくれると助かるってワケで」

その瞬間だった。

あきらかにゆりなの動揺していく様が見て取れた。

「ワガママ――？」

瞳孔が開き、先ほどまでの元気ハツラツ少女とは思えないような無表情に変わっていく。

目の光がサッと消え、どこか遠くを見ながら、

「ごめんなさい……言わないから、もうボク、『ワガママ』言わないから」

「え？」

「ちゃんと良い子になるから、ボク、ワガママなこと言わないから。だから、だから、だから――」

気が抜けたようにペタンと座り込むゆりな。

「大丈夫か、どっか具合でも悪ィのか？」

どうしたらいいのか狼狽している間にも、ゆりなの呼吸が荒くなっていく。

胸を押さえて咳き込む彼女に、何も出来ず呆然と立ちすくむ俺。

「けほっ。え、えへへ。ごめんね、しゃっちゃん。
ボクは、だ、大丈夫だから、先にお部屋戻っててていいよ……けほっ、けほっ」

「……パパさん。コロナたちは大人しく立ち去るべきだと思うんです」

「んなこと言ったって、放っておけねぇだろ！」

そう振り向いた俺の目の前に、どこか悲しげな表情をしたクロエが現れた。

「あーあ。アレを言っちまったか。いつ出てもおかしくなかったからな、しゃあねぇか。
コロ助の言うとおり、おめぇらは部屋に戻ってな。あとはオレがなんとかすっから」

いつもの事だというような軽い調子で言った後、

「――シラガ娘。ポニ子にもう『あの言葉』を言わねぇでやってくれ。

すまねぇ、ワケはいつかちゃんと話すからさ……」

背を向けたまま、黒猫はそう呟いた。

第十二石：ナミダ、乾かして

その後、ゆりなの部屋で髪を乾かす俺たち。

小さなピンクのドライヤーを髪にあてつつ考えることといえば、やはりさっきの事だ。

「ありゃあ……一体、なんだったんだ。おめぇさん、なにか知ってるかい？」

再びに、俺の組んだあぐらの中へと陣取ったコロ美に訊いてみると、

「コロナもわからないんです。お姉ちゃまは『あの言葉』を言わないでほしいって言ってたのです」

あの言葉――。

これはおそらく『ワガママ』というワードで間違いないだろう。

俺が『ワガママを言うな』と言ったから、ああなってしまった……と考えるのが妥当か。

だけれども、そんなたかだか言葉一つであれほどまでに辛そうに咳き込むか？

「コロナはトラウマの仕組みという番組をテレビで観たことあるのです。
もしかしたら、その言葉がそれを――」

「刺激した、って？」

いやいや、まさか。まだ十にも満たない若さでそんなものあるはずも無い。

フツーのどこにでもいそうな子供に見えるゆりなに、『トラウマ』だなんてそんなもの。

「パパさん、本当にそう思ってるんですか？
子供だから傷つかないと、何を言われてもヘーキだと、そう思ってるのですか？」

ジッと見上げてくるコロナ。

む。

やけにつっかかってくるじゃねェか。

「……まどろっこしいねぇ、何が言いてェんだ」

「コロナは、旧魔法少女さんよりチビチビなんです。
だけど、大人と一緒でちゃんと傷つくのです。パパさんに契約断られて怒鳴られたときとか、
パパさんにコロナと一緒のお風呂はつまらないって言われたときとか……ちゃっかりと傷ついてるんです」

げっ。

何食わぬ顔しているから平気なんだろうと思っていたのだが、マジでか。

「マジなんです」

ありゃ、まぁ。

なんて返していいものやら、ドライヤーの風を冷風に切り替えながら、そう考えあぐねていると、

「でも、コロナは傷ついてもすぐに治るんです」

「そりゃあ、どういうこってィ？」

という質問に一瞬だけ俯いたあと、

「それは――。

パパさんが、その後すぐに優しくしてくれるから、なんです」

そう頬を染めて俺のパジャマをぎゅっと握った。

「あんだそりゃあ！　ははっ、わけわかんねーヤツぅ」

ぷっと吹き出した俺に、コロ美は珍しく怒った表情で、

「む。む。コロナは真面目なお話をしてるんです。

つまり、コロナが言いたいことは、傷ついても癒してくれる人がいればいいと思うんです」

「ふぅん。そういうモンかねェ」

イマイチよくわかってませんといった俺の流し的なリアクションを不服そうに、

「あのですね。パパさんはさっき、
旧魔法少女さんがフツーのおバカそうな子供だから傷つかないって言ってましたよね」

いや、おバカそうなとまでは言ってねェけれども。

「でも、逆に子供だからこそ傷つくようなことがトラウマたる原因だとしたら？
そして、もしあの人が『いわゆるごく一般の普通の子供』じゃないとしたら？」

「……さてはて。言ってる意味がよくわかんねェなあ」

「パパさんなら分かるハズ――ううん、きっともうとっくに気付いてるハズなんです。
彼女の心の傷に、そして彼女と自分とのある共通点に」

へぇ、これはこれは。

人の心の中に土足で踏み入ることのできる、スンバラシイ能力の持ち主なだけある。

「いやはや。それは俺の心ん中を覗き見たから、だからそう断言できるってワケかィ？」

少々おどけて言ってみるが、

「パパさんの言葉を借りると、コロナの能力をそこまで買いかぶって欲しくないんです。
少しだけ、パパさんだけの考えが読み取れるというだけでその奥底までは届かないのです」

「だったら、どうして俺の全てを知ったかのような、」

訊こうとしたが、俺はすぐさま口を噤んだ。

何故なら、コロナがあの光った眼で、ニィっと不気味に笑いながら俺を見上げたからだ。

「それは――。ピース様の選んだ『コドモ』だから、なんです」

「ど、どういうこっちゃ。答えになってんのか、そりゃあ。もっと具体的に言ってくれよ」

「肯定。つまり、それはですね――」

スッと息を吸って言葉をためるコロナ。

ごくりと喉が鳴る。

……ピースか。あの唯一にして最強の魔女だとかいうふざけた婆さんが選んだ子供。

俺は当然として、やはりゆりなも故意に選ばれた子供――そういう事なのか？

いよいよキナ臭い話になってきたもんだ。

そう、神妙な顔をして待っていると、

「へっくち！　……なんです」

ガクッ。

なんとも間抜けなクシャミに一気に脱力してしまう俺。

「あらら、鼻水出てんぞ」

「あ、ぅ」

鼻水をズルズルとすすろうとしたそいつに、

「こら。ちゃんと鼻をかまないと中耳炎っつう、こわ～い病気になっちまうんだぜ」

ティッシュを二、三枚取り出して鼻にあててやる。

「ほら、チーンて」

「ちーん」

「ん。キレイキレイなった……って、つまりそれはヘックチなんですっつーのは、
どういう意味なんでぇいコロ美ィィイ！」

うがーっとすごんだ俺に、コロナは鼻を真っ赤にして、

「ごめんなさいです。今のクシャミで何言うか忘れちゃったんです。
えっと。パパさん、コロナの髪も乾かして欲しいのです。風邪ひきそうなんです、いささかに」

「ったく、興醒めたァこのことだな。あと、さりげに俺の口癖マネしてくれるなよ」

「おっけー。恐縮なんです」

「……コロ美、おめぇワザとか？」

「ぶいっ」

いや、どうしてそこでブイサインが出るんだよ。

ホント意味不明なガキんちょだ。もしかすると、今時の幼稚園児はみんなこんな感じなのか？

だとしたら全国の保母さんに同情しちまうぜ……。

そう頭の中で嘆いていると、またもやコロナが大きなクシャミをかました。

「あー、もう。しゃあねぇなぁ。俺様が乾かしてやんよ。チッ、めんどくせェめんどくせェ」

「やたっ」

「前向けー、前」

「肯定なんです！」

と、前を向いたはいいが、ぴょんこぴょんこと跳ねるもんだからたまらない。

「はしゃぐなって」

ドライヤーをオンにしながら、

「ほら、ジッとしてなァ。動くとヤケドすんぞ。つーか、霊獣サマとやらも風邪をひくモンなのか？」

カラダ丈夫なんだよな、確か。

クロエ曰く、ちょっとやそっとのことじゃあケガしないとか言ってたよーな。

「肯定。ケガはしてもすぐウニョニョって治るんです。でも病気は普通にしちゃうのです」

「あーそう、ウニョニョっスか。お客さん不気味な体してるんスね」

「はい。不気味な体なんです」

そんな美容院のようなヘンテコな会話をしつつ、コロナの髪を乾

かしていると、

後ろのドアがカチャっと開いた。

「ん？」

振り向くと、まだ周囲に湯気を立ち昇らせているゆりながソーッと顔を覗かせていた。

「お、ゆりな。早いねェ、もうあがったのかい」

うんっ、と笑顔で返されるものだとばかり思っていたのだが、しばしの沈黙のあと、

「……あ」

と言って後ずさり、そして、

「う～っ」

と目に涙を浮かべてバタンと扉を閉めた。

どしたんだ？　と首を傾げている俺に、

「きっと、パパさんとどう顔をあわせていいのかわからなくて困ってるんです」

なるほど。別に、気にしちゃあいねーのに。

――いや。あんなこと言ったんだし、気にしなければいけないのは俺のほう、だよな。

「パパさん。コロナのさっきのお話覚えてるですか？」

「ウニョニョってケガが治るんですって話？」

「否定。ウニョニョじゃないのです。傷ついても、癒してくれる人がいればってくだりなんです」

「ああ、それ」

癒してくれる人って、言われてもねぇ。

少なくとも、今日チビ助と会ったばかりの俺にそんな大役は務まらねーな。

だけど。まぁ、なんだ。モヤモヤすんだよな。

癒す云々は正直ピンとこねェけど、あいつにはちゃんと謝らなきゃいけないな、っていうモヤモヤ感。

ま。ウダウダ考えていても埒があかねェし。

立ち上がり、ぐいーっと伸びをしながら、

「うしっ、あとは自分で乾かせるな？」

チビチビ助の頭をぽんぽんと叩いて、ドライヤーを渡す。

そしてドアの前に立ち、言ってみる。

「おーい、チビ助やーい。お前さんも早く髪乾かさないと風邪ひいちまうぞ」

いなかったりして。だとしたら恥ずかしいコトこの上ないが。

「しゃ、しゃっちゃん。えっと、その、ボクね。あのあの……」

お、いたいた。

ゆりなの声が聞こえやすいように、背中をドアにぴったりとくっ付けて、

「あー。ゆりなさ、さっきはゴメン、な」

「……えっ？」

「なんつーか、イヤなこと言っちまって。悪気は無かったっていうか、ありゃ、コレいい訳か。
その――とにかくゴメン。もう言わない」

「ううん。違うもん、しゃっちゃんが謝ることなんて全然ないよ。
ボクの方こそ急におかしくなっちゃって、だからしゃっちゃんに謝らなきゃいけないって思って……」

「じゃあ、おあいこ」

「でも、」

「めんどくせーから、おあいこ」

「う、うん。ありがと、しゃっちゃん」

ドア越しに泣き声が聞こえてくる。

ホント、泣き虫なヤツ……。

「あのさァ。髪、乾かしてやるよ。特別サービス、俺けっこう上手いんだぜ。
さっきコロ美で実験したし」

聞いた途端、頬を風船のように膨らませたコロナにごめんなポーズをとった後、

「だからまぁ、もう泣くのはやめてさ。笑っとこうぜ。
お前さんはそっちのほうが、しっくりくるっつうか――まぁ、なんていうか、」

言いかけたところで、急にドアがバッと開いた。

「しゃっちゃん！」

体を支えていたモンが無くなった俺は一瞬倒れそうになるが、すぐさま支えられた。

というよりも、抱きしめられたつったほうがコレは正しいのか。

「……な、なんだよ、ジャーマンスープレックスでもかます気かィ？」

そんな俺の冗談に、

「にゃはは。違うよーだ。チョークスリーパーだもんっ」

ポヘッと首を絞められた。

全然痛くは無かったのだが、そっちがその気ならと、

「いっひっひ。やったな、こんにゃろー。ジャイアントスイングすっぞ！」

「バリアするし！」

「甘い甘い、俺の世界じゃあ投げ技はバリア貫通なんだぜ！」

「えーっ、そんなのずるい。今はこっちの世界だもんっ」

「秘儀、チョーク抜け！」

ゆりなの腕からするりと抜け出し、

「さーて、覚悟しろってなモンで……」

そう振り返って、俺は目を見開いた。

あれ、コイツ。

「むー。こうなったら霊冥呼んじゃおっかなぁ」

よく見ると意外に――。

「しゃっちゃん？」

>i31126|1761<

「あ、ああ……。
いや。ていうかお前、ずりぃぞ。プロレスごっこで霊鳴呼んだら反則負けだっつうの」

「あ、そっか。反則負けになっちった。
にゃはは！　やっぱ、しゃっちゃんと一緒にいると楽しいなぁ」

屈託の無い笑顔を向けるゆりな。

俺は少し肩をすくめたあと、

「ん。やっぱそっちの方がチビ助っぽい」

と、ついボソっと言ってしまった。

「え、しゃっちゃん何か言った？」

「なーんも。ほれ、それより髪乾かさねーの？」

「乾かすー！　わーい！　アイスウォーターちゃんわーい！」

バンザイして、何故かコロナを抱き上げるゆりな。

無表情のままブンブンとなすがままに振り回されるコロ美。

せっかく綺麗にセットしてやった髪がボッサボサになって……トホホとこめかみを押さえる俺、といった構図だ。

やれやれ、しかしまぁ。

ああ言ったはいいが。

ちと、こいつの場合、元気すぎるのも問題かもしれないな。

第十三石：飯は高し食せよ乙女

「はいっ、どうぞ召し上がれなのです！
今日はしゃっちゃんちゃんと、ころこっちゃんの為に腕によりをかけて作ったです……っっ」

テーブルに続々と置かれていく料理を前に俺は唖然としていた。

「え、これ全部お姉さんが作ったんですか？」

訊くと、ゆりなのお姉さんは飛びっきりの笑顔で、

「はいっ。お二人に喜ばれるよう、どの料理が良いか三思九思しての結果ですっ」

＞i３２８１０｜１７６１＜

その結果が、この天を穿つようなタワー盛りご飯ですか。

こりゃあ、白飯だけですぐに満腹になっちまうぞ。

一つ一つがパーティ用かと思える程の量のおかずも凄まじいけれども……。

隣に座っているコロナも額に汗を浮かべて、

「こ、コロナは見てるだけでお腹いっぱいになってきたんです」

右手に持った箸がぷるぷるカタカタと震えている。

俺はそいつの肩をちょんと突付いて出来るだけ小声で、

「おい、コロ美。お姉さんのあの顔を見てもそれが言えるかィ？」

「……う〝っ」

満面の笑み。

両手をギュッと握って、キラキラと目から星を飛ばしまくっている。

星マシンガン十発ごとに俺とコロナを交互に見ているワケで。

そりゃ、あんな期待された表情で見つめられた日には……。

「わ、わーい。美味しそうなんです！　いただきまーすっ」

そう言うしかねーよなァ。

俺とゆりなもそれに続いて、

「いっただきまーすっ」

＋　＋　＋

二十分後。

数多あるお皿の中身は、見事にキレイになっていた。

「にゃはは、お姉ちゃんのご飯美味しかったーっ。
ボクの大好きなロールキャベツもあったし！」

ゆりながコップに注がれた麦茶を飲み干して言う。

「あらあら、うふふっ。ゆっちゃんは小さい頃からロールキャベツが好きでしたものね。
お二人はあの中に何か好きなおかずありましたでしょうか？
なるべく好物に当たる様にと多く作ったつもりなのですが……」

ゆるりと訊ねられるが、俺達はそれどころじゃない。

「う、うっぷ。コロ……美。お前が、答えてくれィ」

まるで漫画のようにでっぷりと出たお腹をおさえながら言う俺と、

「肯定、なんです。
えっと、こ、好物以前に、ご飯だけでポンポンがパンパン、という状況……なのです」

まるで漫画のようにぽっこりと出たお腹をおさえながら言うコロ美。

そうなのだ。

俺とコロナは茶碗に盛られたタワー飯を平らげるのがやっとで、おかずまで手を出せずにいた。

とすれば、なぜ皿の中身がキレイになっているのかという疑問が

出てくるのだろうが、
なんてこたァない。
「あれ、しゃっちゃん達おかず食べてなかったっけ？」
「えっ！　も、もしかして私達だけで食べてしまったのでしょうか……」
と。
きょとん顔を見合わせる姉妹。
何を隠そう、彼女達が猛スピードで食べていたというオチだ。
そりゃあもう凄まじい光景だったぜ。
笑顔のままパクパクモグモグと、華奢な体のどこへそんなに入るのかと問いたくなるくらいだ。
見ているだけで腹いっぱいとはまさにあの状況だな。最上級の例だろうよ。
「なんという、なんということでしょう……。
では、ただいますぐに作り直しますっ！　悔悟憤発ですっ！」

「い、いや、大丈夫ですからホント！　お気になさらずっ！」

青ざめた顔で即答する俺に、

「……けっぷ」

こっそりとおくびで答えるコロナ。

「あう。ごめんね、しゃっちゃん。
ボク、みんなとご飯食べるのが楽しくって、全然気付かなかったよぅ」

ゆりながそう言って、申し訳なさそうに背中を丸くする。

まーた、そうやってすぐに謝る。

謝る必要なんざ微塵もねェってのに。

「ふっ、構わんぜ。俺のことは気にせず、いっぱい食べて大きくなるんだぞ、ゆりな。
摂取した栄養は最大限に活かすんだ」

「え。う、うん……。がんばってみるっ」

「頑張りすぎて怪獣なみになられても困るケドな」

「わっ、怪獣かっくいーっ。がお、がおー！」

「ハ、ハハ。あんだけ食ったのに、元気っすね……」

あいててて。

腹痛のときによくわからん掛け合いなんてするもんじゃねェな。

そう力無く笑う俺に、

「ゆっちゃんとしゃっちゃんちゃん。

とても仲良しさんなんですね。かなり前からお友達なのですか？」

頬杖をつきながら、微笑むお姉さん。

「ええ、まァ……」

本当は今朝初めて会ったばかりなんだけれども。

そう言うワケにもいかねぇし。

「えへへ。ずっと前からお友達だもんね。
仲良し、仲良しー！　がおー！」

「――そ、そうだな。っておいコラ、人の耳を噛むなって」

「がおおーん！　がるるるー」

「もはや怪獣じゃなくてただのライオンだろそれ」

残り少ない体力から搾り出したチョップをかましてやると、そいつは何が楽しいのか、

「にゃはは。殴られちったー。きゃいんきゃいーんっ」

と、小走りで食器を洗いに行ってしまった。

つーか、動物キャラをやるならやるで、ちゃんと統一してくれよな。

「あ。コロナも洗うんです。食べたらキレイキレイするのです」

隣のツーサイドアップが言って、ぴょんと椅子から飛び降りる。

そうだな。んじゃ、俺も腹ごなしに手伝うとするかねェ。
手を広げて待つコロ美に渡そうと、俺たちの食器を重ねていると、
「ん？　なんだこれ。『ももはせんよう』だぁ？」
コロナの使っていた、ちんまいピンク色の箸にそうマジックで書かれていたのだ。
ひらがなだから分かりづらいが、これは多分『ももは専用』という意味か？
お姉さんが俺の手元を覗いて、
「あらあら。ゆっちゃーん、もっちゃんの小さい頃のお箸だって、懐かしいですねーっ」
エプロンを後ろ手に結んでいる最中のゆりなに声をかける。
「それ、コロナちゃんにってボクが戸棚の奥から見っけたんだよー。ももちゃんってば、ピンク色のもの全部に『専用』って書いてたもんね。
ボクのケシゴムの裏にも書かれてたっけ。にゃははっ」

それを聞いたゆりなは後姿のまま、とても懐かしそうに答えた。

「あの、ももはさんって誰なんですか？」

コロナの疑問に俺も続ける。

「もしかして、もっとご兄弟がいらっしゃるとか？」

実はもう一人いる一番下の妹が使ってる、みたいな。

「んーん。違うですよー。もっちゃんは、ゆっちゃんの幼馴染さんなのですっ！

桃色なサラサラの髪と白い肌がとても可愛い子なんですよ。

このお箸は、幼稚園の頃もっちゃんが遊びに来てたときによく使ってたんです。

でも――年長さんになる頃には、もう使われなくなっちゃったんですけどね……」

寂しそうに俯いてしまうお姉さん。

なにやらこれは。

これ以上聞いてはイケナイ雰囲気のような。

「そ、そうですか――」

どう話を切り替えしたらいいものかと食器をコロナに渡しつつ考えていると、

「何故なら、大きくなったもっちゃん専用お箸があるからなんですっ」

ドギャーンと取り出されたピンク色の箸には、これまた『続・ももは専用』と書かれていた。

「今もっちゃんが使ってるのこれですよね、ゆっちゃん」

「うんっ。昨日もそれ使ってたもん」

「え……。昨日も？」

するってぇと、今でもちょくちょく遊びに来てるってことかィ？

「ちょくちょくっていうより――毎日です。四歳の頃から今までずっと、ですねっ」

食器を運び終えたコロナの頭を良い子良い子と撫でながら、事も無げに微笑むお姉さん。

毎日って。

しかも四歳の頃からとなると、ゆりなが九つとして五年間ってことになる。

いやいやいや。

フツウ、かなりの迷惑もんだぜ、そりゃあ。

一晩宿を借りる身の俺が言えたモンじゃないけれどもさ。

「ぜんっぜん、です！
むしろ一日でももっちゃんがいらっしゃらないと、とても不安です。
悲しいです。がっかり、なのです。
きっと、しゃっちゃんちゃんと、ころこっちゃんも彼女と会えば自然と仲良くなれるハズです……っっ」

「そ、そうですかねェ」

「え。コロナも、ですか？」

「そうですともっ！　だって――」

あまり乗り気でないといった雰囲気の俺たちをいっぺんにギュッと抱きしめ、

「お二人ともこんなに、こんなに可愛くてイイ子なんですから。イイ子同士はすぐにお友達になれること間違いなしなのですっ。肝胆相照、ですっ」

お姉さんは全てを包み込むかのような優しい声で言った。

この人は、どうして。

一度会っただけのどこの馬の骨ともわからないヤツにここまで柔らかな言葉をかけるのだろうか。

いや――。

この姉妹は、か。

いささかに苦手だな……この温もり。

俺はお姉さんの腕からするりと抜け出して、

「す、すんません！　俺、あの捨て猫の様子が気になるんでっ」

そそくさと階段をかけあがった。

＋　＋　＋

部屋に戻ると、捨て猫もといクロエが学習机の上で毛づくろいをしていた。

「おろ。遅かったじゃねーか。ポニ子とコロ助は一緒じゃねぇのか？」

「もうしばらくしたら来ると思うぜ……。あたたた」

急に走ったもんだから、腹が悲鳴をあげやがる。

「その様子っつーか腹をみると、例のアレを喰らったみたいだな」

あの山盛り飯のことを知っているのか。

ベッドにドカッと座り、一息つく。

「ああ。喰らったぜ、二重の意味でなァ」

「けけっ、うめぇこと言うじゃねーか。
ポヨ子の飯、美味かったか？」

「白飯しか食えなかったけれども。炊き方はかなり上等なモンだったぜ。丁度いい硬さで。
てか、ポヨ子ってどういう意味なんでィ」

「んなの決まってんだろー？　ぽよぽよしてるから、ポヨ子。
性格と体と、二重の意味っつうヤツでさ。にっしっし」

「……おまえさんなァ。エロ親父みたいな反応に困る発言、謹んでくれっての。
俺はこれでも中身は健全な中学生男子なんだぞ」

「はっ。よく言うぜ。てめーはそんじょそこらの鼻水たらした中学生とは違うだろ」

「これはこれは。買いかぶってくれるねェ。恐縮だけれども、ここは素直に喜んでおこうかね」

「飄々としやがって。ジジくせぇのはどっちなんだか。ま、だからこそピースに選ばれたのかもな」

またその話か。

選ばれしもの、うんたらかんたら。耳にタコだって。

コントローラーのAボタン連打で会話を飛ばしたいくらいだね、まったくもって。

「わりーけれども、」

言いかけたところで、黒猫が跳躍。

音も無くベッドに飛び移り、俺の膝の上で丸くなる。

「なんだ。暑苦しいぞ、毛皮ヤロー」

「けけけっ。シラガ娘、おめぇは腹いっぱいで動けねぇんだろ。だったら大人しくオレを可愛がりやがれ。満足したら退いてやんぜ」

俺は小さく舌を打った。

「口やかましい猫だなまったく」

実に腹立たしい食肉目小動物の背中を撫でようとして、俺は止まった。

何故なら、クロエが驚いたような顔で俺を見ているからだ。

「なんでェい。俺様の顔に飯粒でもついてるのかィ？」

「あ。いや――。な、なんでもねぇよ」

「……変なヤツ」

なんでもないと言われると気になるのは何でかねぇ。

しかしながら、と俺はクロエの背中を撫でながら思う。

このバカ猫と一緒にいるときは、なんつーか気が楽だ。

言葉遣いが俺に似てぶっきらぼうな為か、気安く軽口が叩ける。

他の女性陣はいささかに、どうもな。（一応こいつも女だっけか）

コロナはただひたすらに面倒だし、ゆりなは少し慣れたが、やはりまだ苦手だ。あの瞳が。

そして、ゆりなのお姉さん。彼女が一番厄介だ。あのほわほわとした温かさが――心底キツい。

「なぁ、シラガ娘よ」

「はーいっ。なぁに、クーちゃん？」

俺のここ半年で一番の茶目っ気に、

「き、気持ちわりぃ声だしやがって。
大体、オレをクーちゃんと呼んでいいのは、ポニ子だけだぜ」
「へぇへぇ。そうかいそうかい、そいつは残念だねェ」

そんなことよりと、黒猫が俺に向き直る。

「さっき何を言いかけてたんだ？　わりーけれども、の続き」

ああ。すっかり忘れてた。

「まぁ、アレだ。散々コロナには言ったのだが、
やっぱし俺ァ、魔法使いなんざやる気しねェから。
どうせ首を突っ込んだら、間違いなくべらぼうに面倒なことになるだろうし。
だからその前に――」

「この世界から逃げ出す、ってか？」

俺の台詞を先回りした後、クロエは器用に腕を組んで瞑目した。

「……言ったハズだぜ。

元の姿に戻り、そして元の世界に帰りたいのなら、いくら探したって方法は一つしかない、と」

未だ目を瞑ったままのそいつに、

「――最悪、姿はチビガキのままでもいい。とりあえず、俺ァ俺の世界に帰りてェって話。
明日か、出来れば今夜にでも俺はこの家を出る。このままズルズルと引き込まれるのは勘弁だ。
行動しないよりはマシってな。何か戻れるきっかけを掴めるかもしれねェし」

ま。姿に関しては、本当に最悪の場合だけれども。

「そうか。わかった」

てっきり怒鳴られるかと思っていたのだが、猫は悟ったように頷いて、続ける。

「お前の呪いを解いて、元の世界に戻してくるようオレがピースに掛け合ってみるぜ。
――抜け出すときはなるべくあいつらにバレない方がいいだろうな。
夜中、タイミングを見計らってオレが声をかける。その隙にこの

家から出るぞ。いいな？」

「そ、そりゃありがたい話だけれどもよ。一体どういう風の吹き回しなんでィ？」

こいつにとっては俺が魔法使いにならないと困るんだろ？

だったら逃走に協力的になるのは、いささか不可解に思えるが。

単純にこの猫の考えがわからんな。

「……猫であるが故の、気まぐれなものと。そう思えばいい」

俺の疑問符に、淡い笑みを返す黒猫。

そいつは一つ大きい伸びをしたのち、再び丸く寝なおして、

「ケッ、硬ぇ太ももしやがって。

誰かさんに似て寝心地サイアクだぜ、ったくよ」

と、口角を上げた。

第十四石：巨大なハチドリ！？　ホバー現る！

「しゃっちゃん、本当に下でイイの？　ボクのベッドで寝てもいいのに」

ベッドの脇に布団を敷きつつ、ゆりなが俺に訊ねる。

「宿を借りてる分際でご主人様のベッドを占領するワケにもいかねーって。
それに、寝ぼけてまたお前さんの腹を踏んじまうかもしれねぇし」

「ふえぇ。それはもうゴメンだよぉ……。思い出したらお腹ズキズキしてきちゃった」

「いっひっひ。そりゃあ、ただの食い過ぎ。
あんだけ腹に詰め込めば痛くもなるって、フツウ」

「えー？　いつもより控えめに食べたのに。
まだまだ余裕で食べられるよ～っと、ほい！　お布団出来たよ、しゃっちゃん」

「おっ、さんきゅう。こりゃあ、寝心地良さそうだ」

完成した布団に胡坐をかく。

やはり、これだね。ベッドより布団のほうがしっくりくるぜ。

にしても、やけにフワフワとしていて肌触りが良いな。なんの柔軟剤を使っているのかね。

「……うげっ、こんなところにも書いてやがる」

マクラの右片隅に、『ももは専用』の文字を見つけ、即座に裏返す。

こいつ、いくらなんでも書きすぎじゃないのか。

ほっといたらこの家ごと乗っ取られる勢いだぞ。

「どったのー？」

ベッドに腰掛けて首を傾げるゆりなに、

「いや、えーっと。アレだ。なんつうか、見事な食べっぷりだったなぁってさっきの思い出して。はは。

すげぇよな、あの量。お前さんの小さな体のどこに入ってるんだって不思議でならないぜ」

「へへへ～。それなら、もうなくなっちゃってるよ。

だって、ボクのお腹はブラックホールだもん！　にゃーんちって」

パジャマをめくり、腹をポンポコと叩いて笑う。

う、うーむ。

あながち冗談に聞こえないところが、恐ろしい。

「そういえば、クーちゃんとアイスウォーターちゃん遅いね」

「散歩行ったんだっけか。すぐ帰ってくるっつってたのに、何やってんだかねぇ」

「なんか、思い出話に花を咲かせてくるんです、とかアイスウォーターちゃん言ってたよ」

「ふぅん。思い出話ねぇ。というか、イマイチあいつらの関係性が分からないぜ。

コロ美はクロエのことをお姉ちゃまって呼んでたけれども……どう見ても似てないよな？」

「あはは、やっぱしゃっちゃんもそう思う？　性格全然違うもんね。クーちゃんは怒りんぼなイメージで、アイスウォーターちゃんはトロンと眠そうなイメージ」

「そうそう。それ以前に、猫と蝶々だしな。元からして別モンすぎるって話さ。

姉と呼んでるけど、きっと本当の姉妹じゃないだろうよ」

とはいえ、それは『霊獣』という特殊な枠で考えると違うのかもしれないけれども。

霊獣。

当たり前の話だが、謎の多すぎる存在だな。

「ふにゃ……あ」

大口を開けてあくびをするチビ助。

時計を見やると、まだ九時手前だが。

いやはや、小学生にはツライ時間かもしれないな。

眠いのかと訊ねると、うん、と頷いて、

「にはは……。いつもはとっくに寝てる時間だから。
でも、クーちゃん達待たなきゃ。それにしゃっちゃんともっとお話ししていたいし――」

そう言って、『ふにゃぁあ』と再びデカイあくびをかます。

限界だろうな、こりゃ。

「話なんざ、明日でもたくさん出来るって。
もう寝ようぜ。少しだけ窓開けてりゃ、あいつらも勝手に入ってくるだろ」

「うん、そうだね。それ採用っ。じゃあ電気消しちゃうよ～」

「おうよ。おやすみ」

「おやすみっ！　また明日いっぱい遊ぼうね」

「……ああ、また明日な」

紐が引っ張られ、電気が消される。

代わりに点いた橙色のナツメ球を見上げながら、俺は小さくため息をついた。

また明日、か……。

＞i341137―1761＜

今夜これからクロエがピースに直接口添えをしてくれる。

スムーズに事が進めば、男の姿に戻れてそのまま家に帰してもらえるだろう。

楽観的な予想かもしれないけれども。一人で脱出を試みるよりは遥かに可能性があるハズ――

そうなれば、俺とゆりなの明日は別々の明日になる。

あっさりと。

もう二度と交わることのない平行線へ。

＋　＋　＋

「起きろ、バカシラガ。時間だぜ」

耳元で囁かれ、俺は不機嫌に目を開けた。

マクラもとに座っていたのは俺よりも不機嫌そうに腕を組む黒猫だった。

もぞもぞとそいつの隣に置いてあるピンクの蜘蛛さん時計を引き寄せてみる。

「……なんでェい、なんでェい。まだ夜中の二時じゃねぇか。つぎ起こしたら、猫じゃらしの刑に処すぜ。にゃんちくしょうめィ」

そう寝なおそうとした俺に、

「ほー。じゃあテメェはこのまま魔法使いをやるってことでいいんだな。

あいわかった、おやすみ」

ガバっと飛び起きる。

あ、あぶねぇ！

「待った、待った！　いやぁ、すっかり寝ぼけててさ。謝るからピースんところへ連れてってくれよ。

なぁってば、プリチーなチョコチップマフィンちゃあん」

「うげぇえ。わーったから、気持ち悪い声出すなって。

ほれ、さっさとついて来やがれ」

「いっひっひ。オーライ。わかりましたんで、っと……アレ？」

ホッと胸をなでおろし、布団から出ようとしたところで、腰に違和感。

タオルケットをそーっとめくって目を凝らすと、そこにはコロ美が眠っていた。

俺のパジャマを左手でガシッと掴みながら、右手の親指をちゅぱちゅぱと吸ってやがる。

「チッ。コロ美のやつ、人の布団の中に勝手に入ってきやがって。どうりで暑苦しかったワケだ」

「……すーすー」

やれやれ。

あどけない寝顔だけ見れば、ただのどこにでもいそうな人間の子どもなんだが。

「どーした？」

「わりぃ、ちょっち待っておくんなま」

言いつつ、起こさないようにとチビチビ助の指を一本一本外していく。

「い、良い子だから、とっとと離しやがりましょうねェ」

最後の指を外し、やっと解放される。
んじゃ、行こうかねと立ち上がった時、
「パパさん……」
げっ、起きちまった？
「ダメ、なんです。
そんな市役所前でソーラン節を踊ったらみんなの迷惑なんです…
…むにゃむにゃ」
って、おい。
なんて変な夢を見てやがるんだ、このガキんちょは。
市役所前でソーラン節って、どんな新手の抗議なんだよ。
「にしし。よっぽどコロ助に気に入られたみたいだな。
さっきもおめぇの話ばかりしていたぜ。そりゃもう楽しそうによ」
「あーそうかい。こんなガキに好かれたところで、別に嬉しくもな
んともねェけど」

首をこきこき鳴らし、今度こそと部屋を出ようとするが、

「へっくちっ、なんです」

またあの珍妙なクシャミ。

ったく、だからあまり長時間ウロチョロ出歩くなって言ったのによォ。

布団をかけ直し、背中をぽんぽん叩いて言ってやる。

「ばぁーか」

一応、ついでに。

「……あばよ、チビチビ」

＋　＋　＋

部屋を出ると、クロエは隣の物置部屋へと手招きした。

とはいえ、キレイに片付いてるけどな。

「この部屋にはベランダがあるんだ。抜け出すには最適ってワケ。
よし、こっちだ」

と、器用に戸をガラッと開けると、ぴょんと飛び降りてしまった。

「お、おい！」

そりゃ、お前さんは猫だから簡単に飛び降りられるのかもしれねェけど。

俺は普通の人間だぜ。

しかも今は小学生レベルだから普通以下だぞ。

「……行けるかな」

二階程度ならと、下を覗いてみるが――いや、これはコワイって。

「あにしてんだぁ、行くぞバカシラガ。男は度胸だろ？」

「バカ猫が！　今の俺はか弱い女の子だぞ、コルァ」

「けっ、女の子っつうなら代わりの愛嬌を用意しろってーの」

ぶつくさ言いながら、しっぽをクネクネと凄まじい勢いで回すクロエ。

「なぁ、シッポ遊びはいいからよ、」

言いかけて俺は固まった。

そりゃ固まりもするさね。

なんせ、いきなり闇色の光に包まれたかと思うと、巨大化したんだからな。

こう見ると、もはや黒猫ではなく、黒虎と言ってもいい迫力だ。

しっかし、まぁ。

空は飛ぶわ、喋るわ、デカくなるわで。

もうこいつ一匹で全部の石を集められるんじゃないのか。

俺がそんなことを考えていると、そいつはフンッと鼻で笑って、

「今のはシッポ遊びじゃねぇよ。巨大化の魔法陣を描いてたんだっつの。

オラオラ、いつまでもアホ面かましてねぇで、背中に乗りな」

＋　＋　＋

何度か振り落とされそうになって、（その際に聞こえた意地悪な笑い声から察するに、おそらくあれはワザとだな）

着いた場所はいつぞやの公園だった。

暗く、赤い満月が俺たちを見下ろしている。

「そこのベンチに座って待ってな。連絡はつけてある。もうじきピースが姿を現すハズだぜ」

言われたままに腰をかけ、そして横目でチラッと黒猫に視線をうつす。

とっくに元の姿へと戻っているクロエ。

あとは待つだけだと、芝生に寝転がり、毛繕いなんて始めていやがるが。

なんともまぁ。

こちとら緊張してるってぇのに。ノンキなもんだ。

「お前さんさァ。ピースサマっつーのはエライ奴なんだろ。
いいのかよ、んな気ィ抜いてて」

そこまで言って思い出す。

似たようなこと前にも言ったような。

そういえばゆりなが『クーちゃんは特別だもん』とか言ってたっけ？

「けけけ。別にいいんだよ。オレはピースの――」

と。

クロエがゆるりと顔を上げた瞬間のことだった。

突如、凄まじい突風と共に、けたたましい空襲警報のような音が鳴り響く。

いや、警報音にしてはいささか歪んでいるというか――

「な、なんだ？　近くで火事でも起きたのかねェ……」

そう黒猫に話しかけたが、そいつは俺の声が聞こえていないのか、独り言のように、

「模造石ホバーだと！？　なんだって、この時間に、このタイミングで！」

なんのこっちゃ。

取り込み中、申し訳ないけれども。もぞーせきホバーってのは、なんでィ？

「百聞は一見にしかず、あれを見なぁ！」

「んあ？」

肉球の指す方向。

俺の座っているベンチの真後ろ、はるか向こうの上空に――

そいつは存在していた。

「な、な、なんだよアレは！？　鳥の……いや、知ってるぞあの鳥。

そうだ……ハチドリだ！　ハチドリの化け物！？」

先ほどのクロエの巨大化なんざ、甘っちょろいものだったと痛感する。

それの何十倍もの超巨大なハチドリが、夜空の下で悠々と羽ばたいていやがったんだからな。

頭上には赤黒く明滅している不気味な光輪――そして顔には鈍色の鉄仮面をかぶっている。

その仮面の奥の目が金色に光ると同時に、再びあの空襲警報のような音……鳴き声を発した。

「そうだ。あいつは『第六番模造魔宝石ホバー』と言う石だ」

石だと。

ウソだろおい……それって、まさか。

「そのまさかだぜ。あのホバーは、パンドラの箱から飛び出した七大魔宝石……すなわち、
オレやコロ助の下に敷き詰められた数多の石――模造魔宝石ってやつの一つだ」

「ってこたぁ、やっぱアレも同じように捕まえなきゃいけないってことかよ」

「ああ。だが――コロ助のときのように話し合いで、とはいかないぜ。模造石どもには心がないんだ。
むしろ話が通じない分、七大よりあいつらのほうが危険とも言える。
ただ、単純に暴れまくるんだからな。それこそ、サルのように。見境もなく」

言って黒猫は鬼のような形相で飛び上がり、

「これ以上喋っている暇は無い。
ポニ子を起こしに行く。今、ホバーと戦えるのはあいつだけだ」

そして、こう続けた。

「おめぇはそこで待ってな。あと少しでピースはやってくる。
さっき話した様子だと、お前を逃がしてやってもいいって流れだったからな。
気が変わってなきゃ多分大丈夫だと思うぜ。
……じゃあな、シラガ娘。あの世でまた会ったらお礼にノミ取りくらいしてくれよな、にっしっし」

飛び去っていくクロエの背中には諦めが見えていた。

そりゃそうさ。

だって、あんな巨大な化け物相手に、あんな小さな子ども一人でなんて。

――たったの、一人でなんて。

そこまで考えて俺は頭をかきむしった。

「ハッ！　馬鹿馬鹿しい。この世界から抜け出すには今しかないんだ。

所詮、一日ぽっちの付き合い。あいつらがどうなろうとしったこっちゃねぇなァ」

そうだ。

災いでも何でも、勝手に起きて勝手に滅べばいい。

チビ助やバカ猫やコロ美が死のうが生きようが心底どうだっていい。

こんなワケわからん世界なんて、もうウンザリだね。

俺は家に帰って、ゆっくりのんびりと寝直させてもらうことにするぜ。

……そうだろう？　なぁ、シャクヤクさんよォ。

第十五石：夜空、咲く

クロエが行ってしまってから、俺はせわしなく周りをキョロキョロと見渡していた。

夜中の二時過ぎ、いわゆる丑三つ時というヤツだ。

そんな時間に公園に一人だけという状況でも十分に怖ろしいのに、後方には不気味な鳴き声をあげる怪鳥がいるもんだからたまらない。

「ちきしょう……。は、早く来てくれよ」

両手で耳を塞ぎながら俺がそう呟いたとき、右方向から誰かの気配を感じた。

「おっ。やっと来たか？」

だが、振り向いた先に居たのは、想像に描いていた鷲鼻の魔女なんかではなく――

ただの小さな子どもだった。

ていうか、どう見てもコロナだった。

どこかでズッコケたのか、パジャマがドロドロに汚れており、
そして何故か、ヘンテコな蜘蛛のぬいぐるみを大事そうに抱きしめている。
えーと……一応、訊いてみるけれども。
「まさかとは思うが、お前さんがピースだったってオチじゃあないよな？」
ぶんぶんと首を振る。否定の合図。
ま。そりゃそうかと頬をポリポリ掻いていると、
そいつは今にも泣きそうな顔で俺に詰め寄ってきた。
「……パ、パパさん。大変なんです、模魔が、でっかいハチドリさんが暴れてるんですっ」
「模魔？　あぁ、模造魔宝石とやらの略称かィ。そういやさっきから突風を撒き散らしているねェ」
後ろを見ずに親指でさし、俺はなるべく冷ややかにこう続けた。

「だから――。だから、なんだってんだよ？」

睨み付けられたコロナは一瞬ひるんだ後、ぬいぐるみをギュッと抱きしめて、

「お、お願いなんです……。コロナと契約してください」

契約して、ホバーと戦い、そして石へと封印してくれ。

お前らはそう言うだろうよ、当然。

しかしながら。もう俺は、とっくに帰ることを決意しているんでね。

「恐縮だけれども、断らせていただく。

第一、ベテランのゆりなが居るんだろ？　きっとあいつがなんとか凌いでくれるさ。

それでもまだ魔法使いが足りないってんなら、俺の代わりにもう少し融通の利くヤツを召還すりゃあいい」

「……旧魔法少女さんはベテランなんかじゃないのです。

なったばかりで、まだ一つしか模魔を捕まえてないし、全然わからないことだらけで不安だって。

――ご飯のお片づけのときにそう聞いたんです。最初はコロナも、

凄い魔法使いさんだと思ってたんです。
素質は十二分にあると、思うのです。でも場数を踏んでいないとなると、もしかしたら……」

ゆりながなったばかりだというのは知っている。

ゆりなが不安がっているというのも知っている。

そして、もしかしたらあのホバーに殺されるかもしれないというのも、

――知っている。

「なぁ、コロ美は何であいつを心配しているんだ？
……最初は殺すとか倒すとか、物騒なこと言っていたじゃねーか」

「別に心配なんかしてないのです。あの人を見るとモヤモヤするのは変わってないんです。
今でも旧魔法少女さんの本気の魔力を確かめたら倒すつもりです」

「だったら、」

どうしてだよ？　と、訊ねようとする前に、コロナは困ったような泣き笑いの表情を浮かべて、

「でも。でもでも――あの人からあったかいご飯を頂きました。あ

ったかいお風呂も貸してもらいました。
あったかいお布団も敷いてもらいました。そしてこのぬいぐるみさんも……」

何かのキャラなのだろうか、存在感バツグンのヘンテコな蜘蛛のぬいぐるみ。

気になってはいたのだが。ゆりなからの借りモンだったのか。

「さっき……貸してもらったんです。居なくなったパパさんを探してたら、
『しゃっちゃんは多分もう二度と帰って来ないと思う。
でもね、本当にしゃっちゃんの事を想うなら、ワガママ言っちゃダメだよ』って言って、
そして、この子を、貸してくれたんです」

後半はすでに声になっていなかった。

俺らが出て行こうとしていたあの時、ゆりなは起きていた。

邪魔をせずに。コロナをあやしつけて。

俺が『ワガママ』を言わないでくれといったあの約束を――精一杯に守って。

本当は心細く、一人では不安だってのに。

「……そうだったのです。ワガママ言っちゃダメだって。パパさんを困らせたらダメだって。
だから、もう邪魔しないんです。ごめんなさい、パパさん。
一日だけだったけど、いろんなことがあってコロナは楽しかったんです。
まるで、本当の――」

言い淀んだコロナの背中から光り輝く羽が生まれる。

「ううん、なんでもないのです。じゃあ……パパさん、お元気で」

「……あ、ああ」

小さなバイバイをして、ふらふらと飛び去っていくコロナ。

その方向は、模魔であるホバーが居る方向だった。

きっと、ゆりなに加勢する気だろう。

「いやはや」

昨日のゆりなとコロナの弱々しい戦いを思い出す。

あんなボケボケコンビがハチドリの化け物に勝てるとは到底思えねェけれども。

ま。俺には――

「関係ない、よな」

そう呟いたとき、後方からホバーの鳴き声が聞こえた。

振り向くと、黒い稲妻が――ゆりなの放ったであろう稲妻がホバーを捕らえていた、

が。

すぐさまそれを弾いて、暴れるように翼を振る。その動作から一瞬遅れてこちらまで強風が襲ってくる。

「こ、こんなに離れていてもこれかよ……」

近くにいるチビ助なんて、ソッコー吹き飛ばされてしまうだろうな。

まったく。序盤の敵とは思えない、どうしようもない相手だ。

一つケラケラと笑った後、俺は暗い空を見上げて、

「なーにやってんだろ、俺ァ」

昨朝と同じ公園の中。

昨朝と同じベンチで。

昨朝と同じセリフを。

ただ一つ、昨朝と違うところはと訊ねられたのならば、

それは――

「来やがれっ、霊鳴！！」

凄まじい速度で飛来する霊鳴を掴むと、そいつは待ってましたと言わんばかりに光り輝いた。

「おお、暖っけぇ。こりゃあホットの缶コーヒーを買うまでもねぇな。タダで使えるホッカイロとくらァ」

言った直後、これまた凄まじい速度で冷えていく霊鳴。同じくして光も消えていく。

期待して飛んで来てみたらそれかいとのツッコミが聞こえてきそうな即時対応だな、おい。

「ウソだっつぅの。そろそろ出番近いからウォーミングアップやっといた方がいいぜ、試作型ちゃんよ」

すぐさま熱を取り戻し、ピカピカと光る霊鳴。なんつーか、まるで生きてるかのような石だな。

ふむ。

「石だけに意思を持つ……なんちって」

急激に冷えこむ霊鳴。再び光り方も切れかかった電球よろしく弱々しくなる。

これはこれはいささかに、と喜んでいる場合でもない、ってね。

さぁて、さてと霊鳴をパジャマの胸ポケットに押し込んで、

「そんじゃま。正式採用型ちゃんには負けないように、気合入れて行くぞってなもんで……一つ！」

＋　＋　＋

公園を後にして数十秒そこらのこと。

「めっけ」

前方にて空飛ぶ園児を発見。そいつは飲酒運転のような蛇行した軌跡を描いていた。

しっかし、煌々とまぁ。ホントよく目立つ羽だな。

おかげ様ですぐ追いつくことが出来たぜっと、コロナの後ろ頭をぽんぽん叩いて顔を覗く。

「遅くすいません、お酒の飲酒検問やっとりますんで。ちょっと息を吐いて……っとと、あんれま。
コロ美ってば、なぁんで泣いてんの？」

真っ赤に泣きはらした眼。

しかも、涙をグシグシと泥まみれのパジャマの袖で拭ってるもんだから、なんともヒドイ顔になっている。

「……パパさん？　な、なんで？」

と、訊かれるのは百も承知の助だ。

「なんでってか。
じゃあ逆に訊かせてもらうけれども、コロ美はなんでホバーんところへ――つぅか、ゆりなのもとへ向かってるワケ？」

「それは……」

ぴたりと羽を止めて、俯くコロナ。

ったく。どいつもこいつも大泣き虫だねェ。

ふぅ、と少し息を吐いた俺はチビチビ助の前に座って、そいつの流す涙を指で拭いながら、

「なんでか当ててやろうか？　飯の恩、風呂の恩、寝床の恩を返しに行く……そうだろ？
んで、俺もそうすることにした」

「――えっ？」

「借りた恩は十倍にして返してやれってな。これ、親父の口癖なり」

続けて言う。

「だぁら、めんどくせェから、まとめて恩返し済ませちまおうぜ。俺ら二人、一緒によォ。
ほら……契約すっぞ、コロ美」

「パパさん！」

泣き顔から一転、花が咲いたようなパァっとした笑顔で飛びついてくるのは結構だけれども。

チビ助が手遅れになっちまう前に、パッパと契約の……呪文？だったかを教えてくれィ。

「肯定なんです！　えっと、えっとですね……あった。
このメモに書かれてる呪文を唱えて欲しいのです」

オーケイ。

手渡された小さなメモに書かれている呪文をそのまま読んでみる。

「――我は命ずる。我に忠誠を誓い、真の力を全て我に宿せ」

その途端、俺の足元に緑色の魔法陣が出現し、胸の奥が燃え滾るように熱くなっていく。

「――我は誓う。主に我の全てを捧げんことを。その力、『翠の氷水』を与えん」

コロナがそう答えると、今度は魔法陣から冷たい風が流れ出してきた。

トクントクンと耳にまで聞こえてきそうな心臓の鼓動。

自分の中で新しい命が生まれてくるかのような、奇妙というかくすぐったいカンジだな。

「ん……もしかして終わり？」

「肯定。契約終了なんです。これでコロナはパパさん専用になりました。ぶいっ」

俺専用て。

モロにももはから影響受けやがったな。

「簡単とはきいていたけれども、本当にあっけねェものなんだな……」

「ついでなので、このままのノリで霊鳴の起動、変身もぽんぽんやっちゃうんです」

「おっと、起動だったらお茶の子さいさいってなモンで」

胸ポッケから霊鳴を取り出し、こう呪文を叫んでみる。

「……試作型霊鳴石弐式、起動っ！　イグリネィション！」

すると、たちまちに青い光が俺の手元を包み込んでいく。

ウゾウゾと手の中で石が杖へと変形していくのが分かる。

すげぇなどういう仕組みなんだこりゃ、と感動する間もなくそれは立派な蒼杖へと変化を遂げた。

ええと、次は……変身だっけか。

昨日のゆりなの変身を思い出してみる。

「んで、アレか。コロ美が宝石にくるりんぱって化けて、それをこの杖でぶち割る、っと」

確かそういう流れだったハズなのだが、そいつは緩やかに首を横に振って、

「否定。それは昔の変身方法なのです。
それだと変身自体は早いのですが、あまり強くないんです。
今の正式な変身への方法は――これの二十ページ参照なんです」

変身の仕方に今とか昔とかあるのか……。

指パッチン。

ポンッと出てきた懐かしくもない取扱説明書を二十ページ目へとめくり――

「な、なんじゃこりゃ！　これを叫ばなきゃいけねぇのか！？」

驚愕ヅラを向けると、コロナは何を当たり前のコトをとでも言いたそうな顔で、

「何を当たり前のコトを？」

「言いやがった！」

じゃなくて。

「こんな恥ずかしいのなんて絶対イヤだ。恐縮だけれども、他の変身方法を要求する」

「否定。これしかないのです。だいじょぶ、一度言っちゃえば霊鳴の起動みたいにすぐ慣れるんです。
パパさん、ふぁいとっ、ふぁいとっ」

ううむ。

グチグチ言ってる時間なんざ、微塵も無いのは解かってるけどよォ。

……ええい、ままよ。

「わーったよ。もうこうなったら、どこまでもやってやるぜ！」

「肯定！　やってやるんです！」

言って、小さな蝶々に戻るコロナ。そしてそのままくるんと一回転。

エメラルド宝石へと姿を変えたチビチビを掴み、

「いくぜっ、コロ美！」

なるべく真上に空高くぶん投げる。

説明書によれば、次に呪文を……唱えなければいけない。

息を吸って目をつぶり、俺はゆっくりと杖を掲げた。

「アイシクルパワー！」

手元に冷たい風が流れ出したところで、

「チェインジ、エメラルド！　ビースト――イン！！」

言うと同時に、目の前へと落下した魔宝石をタイミング良く杖で叩き割る。

これで、合っているハズ――ごくりと喉が鳴ったその時だ。

粉砕されたエメラルドの破片が光り輝き、瞬く間に俺を包み込む。

「ひ、ひえぇえ」

一瞬のうちに裸にむかれ、足元に巨大な魔法陣が浮かび上がった。
その中心部から、暖かいエメラルドグリーンの水流が噴き出し、薄緑色の下着が着用される。
いや、別にパンツは変える必要ないだろ……と顔を赤くしていると、今度は雪が舞い上がった。
その雪が俺の足先をクルクルと回るたびに、コスチュームが現れていく。
それはあれよあれよという間に髪先にまでへと到達していった。
なんか髪をやたら引っ張られた気がするな。
まさか髪型までいじくられたのか？
と。
確かめようとしたその時、無理矢理に深い前傾姿勢へと体が持っていかれる。
「あいてて！」
涙目で背中を見やると――そこには緑色に光り輝く巨大な蝶の羽が生えていた。
コロ美と同じだ……面白いぞ、もしかしたら。

試しに背中に力を入れて、空中へ浮くようにイメージしてみる。
だがビクとも体が持ち上がらない。
もう一度だ。
「チィイッ……飾りじゃねェんだろ？　この羽は！」
踏ん張ったその途端、羽から凄まじい量の光の粒子が溢れ出し、
（というよりリン粉か？）
俺は夜空へと飛び上がることに成功した。
「ふははっ……やったぞ」
その全ての工程を終えた時――
暗闇に染まる町並みを見下ろした時――
俺はようやく、魔法使いになった実感が湧いてきた。
＞i35772―1761＜

自分の姿を改めて確認してみる。

白を基調としたゆりなに負けず劣らずのド派手なドレス。

緑色に煌くオーラがゆらゆらと俺の周りを流動し、時々水色の雪の結晶が発生しては弾けてを繰り返す。

「こ、これが、俺の――」

沸々とこみ上げてくる力に、思わず笑ってしまう。

「ククク。この力、よく馴染む」

気分を良くした俺は杖を肩に担いで、

「今行くぜぇええ、待ってろよチビ助！！」

夜空を蹴り飛ばした。

第十六石：飲み込んだ世界を、もう一度

「かーっ、ごちゃごちゃとまぁ。勉強みたいでイヤんなるぜ」

向かう間に少しでも暗記しようと、取扱説明書を読み返していた俺の頭の中に、

『パパさん、そろそろホバーのもとへ到着するんです』

コロナの声が響く。

顔をあげると、目の前にハチドリの巨大な背中が現れた。

「うわっとっと！」

腰に力を入れて急ブレーキ。

あっぶねぇ。そろそろどころか、激突するところだったぞ。

『あう。この状態だと、イマイチ距離感がつかめないんです』

「あれま。そいつは知らなんだ。ま、運転代行ご苦労さん」

それにしてもと、改めてホバーを見上げてみる。

＞i３７９３９―１７６１＜

「うっひゃあ」

こ、こりゃあ……いささかに。

遠目で見ていた時と、迫力が桁違いだな。

というかフツーに無理だろ、コレ。

「なぁコロ美、このドレスってポッケついてねーのか？
説明書を仕舞いたいんだけれども」

『否定。ポッケは無いんです、でもスカート横にポシェットがあると思うのです』

確かに花のアップリケがついたピンクの可愛らしいポシェットは

あるんだが……。

いささかに小さすぎるぞ。これじゃあおにぎり一個でいっぱいじゃねぇか。

やれやれ。

どこの世界でもデザイナーとやらは機能性というものを軽視する節が、

「きゃあああ！！」

うおっ。

この悲鳴、ゆりなの声か――！

「やべぇ！　どこだ、どこにいる？」

俺は慌てて取説をパンツの中へ押し込むと、即座に羽を広げてホバーの前へと飛び出した。

一瞬、強風が頬を掠める。

下を覗くと、杖にまたがったまま吹き飛ばされていくゆりなの姿が見えた。

マズイ、このままじゃ地面に叩きつけられちまう……！

説明書に書かれていた魔法の仕組みという項目を必死に思い出す。

たしか七大魔宝石に限り、想像力とセンス次第で主体となる能力をどのようにもアレンジ出来るらしい。

つまり、俺が割った石はコロナであり、その能力は『水』及び『氷』となる。

しかしながら、水や氷でどうやってゆりなを……。

いや、待てよ。

そういえば変身したあの時に確か――

上手く出来る可能性は低いかもしれないけれども。

「ここで、やらずして！」

研ぎ澄ませ、シャクヤク。

想像だ――

創造しろ――！

「コロナが魂よ、我に翡翠の水を宿せっ」

杖の表面に薄緑色の水が流れ出したことを確認し、

「ぷ～ゆゆん、ぷゆん！　ぷいぷいー……ぷうっ！」

そいつを振り上げて、ゆりなへ向けると俺はこう叫んだ。

「すいすい、『スノードロップ』！」

その瞬間、杖の先から飴玉サイズのガラス玉が次から次へとゆりな目がけて飛び出していく。

「おおっ、マジで出るとは。こいつはたまげた！」

初めて出した『魔法』に舞い上がった俺は、

杖からポコポコ生まれていくガラス玉をひとつ掴みあげて、月光に透かしてみた。

ひんやりとした氷細工のガラス玉。

その中には無数の雪がヒラヒラと舞っている。

月光に照らされている為か、角度を変えると雪が金色にキラッと輝くという、何とも神秘的な玉っころだ。

「ほー、キレイなモンだな。売ったらそこそこ良い金になりそうだねェ、いっひっひ」

なんて満足げにアゴをさすっていると、若干引いた様子のコロナの声が響いた。

『パ、パパさん……。
そんな魔法出して、旧魔法少女さんにとどめをさすつもりなんですか？』

「えっ！？」

ギョッとして見下ろすと、俺の放った飴ちゃんが猛然とゆりなを襲っているではないか。

「あっちゃー……予想外」

「ふぇええーん！　なんか変なのも飛んできたようー！」

と、泣き叫ぶゆりなの声が聞こえるか否かのところで俺は空を蹴った。

羽に力を入れて最大限の加速。

「ぷゆゆん、ぷゆん、ぷいぷいぷう！　間に合えっ、すいすい～！」

スノードロップがゆりなに当たる直前、そいつの前に駆け込んだ俺は、

杖を腰に構えて、抜刀よろしく引き抜いた。

「出てみろ、アクアサァアアベル！」

言った直後、数コンマの世界で杖が水を纏った刀へと変化する。

感動している暇もなく、俺はがむしゃらに刀を振って飴玉を叩き割った。

すると、どうだろう。

割られた飴玉から大量の雪が舞い散り、地面を瞬く間に覆っていくではないか。

「きゃっ！？」

「うおっと！」

勢い余って積もった雪の中へとダイブする俺とゆりな。

痛てェ……。もっと早く割っておきゃあ良かったぜ。

まぁ、なんとか膝を擦りむく程度で済んだし、初めてにしては上出来か。

なんて立ち上がった俺の股間あたりでモゾモゾと何かが動く。

「わ。わ。真っ暗！　怖いよぉ！」

「コラ。人のスカートん中で勝手にお化け屋敷ごっこすんな。遊びたけりゃあ、ちゃんと入場料払いなァ」

スカートをめくると、雪からポコッと頭を出したゆりなが不思議そうに俺を見上げていた。

「あ、あれ？　もしかして、しゃっちゃん？」

「もしかしなくても俺だってーの。見りゃあ、分かるだろォ」

「だってだって、その格好……」

口をあんぐり開けながら、体の隅々まで視線を巡らすゆりな。
ああ、そうか。
そういえば、今の俺って魔法使いモードになってたんだよな。
ちょいと自分の姿に照れくさくなった俺は頭をポリポリかきつつ、
「いやぁ、チビ助のより露出激しいけれども、これでも結構暖かいんだぜ。
この周りのうにょうにょしたオーラがさ。まるで温泉に浸かってるみたいで、」
と。
快活に舌が回り出したところで、
「どうして――？」
ゆりなが唇を震わせる。
「あのまま、おうちに帰っちゃうのかと思ってたのに。
もう、二度と会えないんだって思ってたのに……どうして？」

「んー。どうして、って」

目を潤ませたチビ助の腕をグイッと引っ張って立ち上がらせる。

そいつの鼻頭に乗っかった雪を一つ払いながら、

「だってさー。昨日、寝る前に約束したじゃんか」

「……約束？」

「また明日いっぱい遊ぼうねって。だぁら遊びに来たってワケ。ちぃっとばっかし朝早すぎるかもしれないけれども――」

ニィッと笑って子どものように続ける。

「ゆ～りなちゃん、あっそびましょ」

それを聞いた途端、不安そうな表情をたちまち笑顔に塗りつぶすチビ助。

「はーいっ！　遊ぶっ、しゃっちゃんと一緒に遊ぶーっ！」

当選が確定した政治家のようにバンザイ三唱しているそいつに、

「いっひっひ。ちょうど面白そうな遊びをしているようだねェ。
それじゃあ、今日の遊びはアレにしようぜ――」

言いながら、右肩を杖でトントン叩いてニヤリと目配せする俺。

「にっしっし。しゃっちゃんてば、ナイスタイミング。
それじゃあ、今日の遊びはアレにしよっか――」

言いながら、左手で杖をクルクル回してニヤリと目配せするゆりな。

そして俺らは杖を同時に止めると、

「「鬼退治ごっこ！！」」

叫んで跳躍。

つまるところのバトル開始というこって。

あの馬鹿でかい仮面鳥相手にどこまでやれるか分からねェが――

だが、今の俺は魔法使いだ。

テメェがファンタジーなら、こっちだってファンタジー。
演じてみせるさ、ガキどもの幻想を！

「ぷ～ゆゆん、ぷゆん。ぷいぷいーぷうっ！
行くぜェ、杖からマシンガン！　すいすい、『スノードロップ』！」

ホバーの周りを飛び回りながら飴ちゃんを放つ俺。
それと同じタイミングで杖にまたがり、飛翔したゆりなが左手をあげて、

「ぽ～よよん、ぽいぽいーぽんっ！
行くもん、指からバチバチッ！　らいらい、『ライトニング』！」

人差し指の先から黒い電撃を放つが、素人目でも分かるくらいに弱々しかった。
以前にコロナに放ったときのような気の抜けた電撃。
直撃を食らったはずなのにまったく気付いてない様子のホバー。
俺の飴っころも大したダメージは与えられなかったようだが――

いくらなんでも、と思った俺は、頭上に浮かぶゆりなに訊ねた。

「どしたんだ？　まさか、相手がハチドリさんだからって手加減してるんじゃねェよな」

「う、ううん。実は、さっき戦ってるうちに霊薬が無くなりかけちゃってて……」

チビ助が言うには、杖の中には魔法の源となる霊薬という液体が注がれていて、（確か説明書の其の参あたりに書いてあったな）

それが尽きると魔法を出せなくなってしまうらしい。

そしてゆりなは俺と違い、空を翔る羽を持っていない為、杖に乗らないと空を飛べないときたもんだ。

杖を使わずに手から魔法を放つことは一応可能だが、霊薬の消費が激しいし、それに威力もかなり弱まる。

だけど、模魔を捕獲するには、捕獲呪文の為にある一定以上の霊薬を確保しておかなければならない。

だから霊薬を節約しようと、さらに威力のない電撃になってしまったというワケだ。

それを聞いた俺は、少し腕組みをした後、ゆりなにこう言った。

「それなら、ゆりなにはチマチマ電撃を与えるよりも捕獲準備してもらったほうが良さそうだな」

「えっ、でも……。弱らせないと捕まえられないし。少しでも魔法撃たなきゃ」

「いや。それで霊薬切れて肝心の捕獲が出来ませんでしたってオチは勘弁願いたい。
あいつを引き付けて弱らせる役は俺がやる。まだまだたくさん霊薬あるしな」

言って、手中の霊鳴へと視線をスライドさせる。

それを振ると、柄先の蒼い宝石の中に霊薬がたっぷり入ってるのが分かる。

「う、うん……。しゃっちゃん、無理しないでね？」

すいーっと飛んできたゆりなが心配げに俺の顔を覗く。

やれやれとばかりに、そいつにチョップをかましつつ、

「任せなって。俺だって、選ばれてここに居るんだ。やってみるさ、程ほどに」

「わかった。ボク、しゃっちゃんを信じるよ」

そう頷くと、ホバー側面のビルへ降り立つゆりな。
目をつぶり、杖を掲げると捕獲呪文の詠唱をはじめる。
よし――次は俺がホバーを引き付けて弱らせる番だ。
俺は、好き勝手に突風を飛ばしまくっているホバーの後ろへ回り込み、
「おーい、鬼さんこちら！　霊の鳴る方へ！」
ゆっくり深呼吸して、霊鳴に魔力を込める。
とりあえずは、あの鬱陶しい羽を止めるのがベターだな。
とくりゃあ、アレをぶちかますしかあるめェ。
「ぷぅゆゆん、ぷゆん。ぷいぷいー……ぷぅ！
すいすい、『エメラルドダスト』！」
振り下ろすと、杖先からモクモクと水蒸気が噴出していく。
そのままの状態で持ち上げると、それはあっという間に空へ昇り、細氷となってホバーを襲う。

俺にやっと気付いたのか、轟音を響かせながら旋回するハチドリ。
しかーしながら、少し気付くのが遅かったようで、見る見るうちに羽が凍っていくじゃねーか。
なんだ？　こいつ、実はただの見掛け倒しだったりして。
これなら、余裕だな――余裕シャクヤクってなもんでっ！
自分の魔力の凄まじさにイケると踏んだ俺は、杖にどんどん魔力を注ぐ。
それに比例して激しさを増す翠玉の細氷。
「落ちろよ、こんちくしょぉおおお！！」
俺がもっと魔力を注ごうとしたその時だ、
ホバーの金色の目が一瞬にして真紅に染まり、とてつもない鳴き声を発した。
「な、泣いたって許してやんねー……」
ぞっと、言いかけて俺は驚きおののいた。

魔法をストップし、小さく後退する。

なぜなら鉄仮面の下部分――鳥であればクチバシ辺りが割れたからだ。

いや、割れただけならばそれほど大したことじゃない。

先の鳴き声である振動で割れたという、ただそれだけのことだから。

だが――その仮面の下にあったものが『鳥のクチバシ』ではなく、『人間の口』だったとしたら？

それが、歯列矯正をしているかのような鉄の奇妙な器具をつけていたら？

普通、誰だって驚愕するっつうの。

俺が呆然と目を丸くしていると、キュィインという何かが擦れるような音が聞こえてきた。

「なんだよ、なんの音だよ！？」

ホバーの出している音かと、俺はそいつのあらゆる部分へ視線を飛ばす。

その俺の慌てようを楽しんでいるのか、ニンマリと『笑う』ホバー。

冷や汗が流れ落ちる間際、俺はその音が発生している箇所をつきとめた。

頭上の赤黒い光輪。それが高速で回転している音だったのだ。

それで、なにを始めようってんだよ――

ビビるかよ、そんなコケおどし。

なにかをしようったって、そんなの！

俺は再び杖を握り締めると、魔力を込める。

もう一度だ。

あいつの動きは確実に鈍っている。

もう一度、エメラルドダストをぶっ放す！

「ぷーゆゆん、ぷゆん……」

しかし、俺はすぐさま詠唱を中断した。

光輪が、ストロボのような強力な赤い光を発した為だ。

「！？」

緩慢な動きでハチドリの口が開かれていく。
その喉奥がチラッと見えた瞬間、俺は自分の『最期』を垣間視た。
脳裏に次々と映し出される俺の死体。
色々な角度から、ありとあらゆる死に様を。
だが、死に様は違えど、状況は皆同じように思えた。
暗い空。佇む仮面のハチドリ。コスチューム姿のまま死んでいる俺。
なんだこりゃ。意味がわかんねェ。
まさか、そんな。
こんなあっけない死なんざ――冗談だろ？
いやいや、よく考えろシャクヤク。
そうだ、これもあいつの攻撃だろう。
ったくよォ。なんて悪趣味で胸糞の悪い攻撃だ。
しかし、恐縮だけれどもそんなモノを見せられたところで別に痛くも痒くもないワケで。

と。

苦笑しつつ顔を上げた時、俺は目が合った。

ホバーと。

いや、正確にはホバーの口の中に存在していた巨大な目玉と――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8741l/

魔法少女は俺がやるっ！

2012年1月6日20時52分発行